

42168

教科書文庫

4
810
42-1922
20000 81504

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

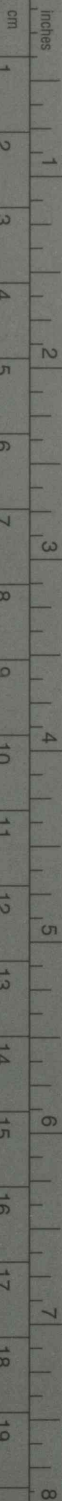


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
大10

訂改 女子國文 卷一



資料室

天 皇 陛 下



資料室

46
810
大10

大正十一年十一月十日 教育部省檢定濟 國語教科用女等學校 書

文學博士芳賀矢一編

改訂 女子國文

東京 富山房發兌



天皇陛下

訂改
女子國文卷一

目次

一	天照大神	一頁
二	月雪花	四
三	櫻のいろく	二
四	渡舟	一六
五	我が國の家庭(自修文)	一六
六	父の許へ	三
七	東京	六

目次

八	汽車の旅(自修文).....	三六
九	眞の人.....	三九
一〇	小木曾つぎ女.....	四五
一一	時計.....	五〇
一二	舊師に贈る.....	五三
一三	智慧伊豆.....	五四
一四	紅花と白百合.....	六一
一五	花の傳説(自修文).....	六四
一六	海王國の婦人.....	六九
一七	汝の母より.....	七三
一八	荻山直女下婢の過失を救ふ.....	八三

一九	花えらみ.....	八八
二〇	須磨日記.....	九三
二一	大和の孝子と芭蕉翁.....	九八
二二	夕立.....	一〇五
二三	蟻(自修文).....	一〇七
二四	祖先.....	一一三
二五	我が國の交通.....	一二五
二六	天長節.....	一三〇
二七	しか女(自修文).....	一三三
二八	鳥の美.....	一三四
二九	柔よく剛に克つ.....	一三三

三〇 看 病……………一三四

三一 病める友の許へ 右返事……………一三七

三二 春夏秋冬……………一四〇

三三 一年の折々(自修文)……………一四三

三四 愛國婦人會……………一四七

三五 明治天皇の御遺物を拜す其の一……………一五〇

三六 明治天皇の御遺物を拜す其の二……………一五三

三七 明治神宮に詣でて……………一五六

目次終

改訂 女子國文卷一

一 天照大神

我が皇室の御祖先は天照大神にまします。高貴の御身を以て農業にいそしみ給ひしこと、古史に「天の狭田長田を以て御田とし給ふ。」と記せるを以て知るべし。又「神衣を織りつゝ齋服殿にまします。」とも見えれば、機織の業をさへ親らし給ひしなり。

御弟の素戔嗚尊、大神の農事を妨げたまひて、春は

狂暴
酔ひしれて

重播しほしまた畔かたを放ち、秋は天斑駒あまのふちごまを放ちて田の中に伏ふさするなど、狂暴のふるまひ度重りしかど、大神は、「酔ひしれてなす業ならん。」と宣ひて、少しも咎めたまはざりき。

髻
鞞裳
をたけび

又素戔嗚尊おのが治むべき國に行かず、高天原に上り來と聞し召し、時、大神は、彼我が國を奪はんとする心あるか。と宣ひて、御髪を結び上げて髻かづとし、御裳もをひきまつひて袴はかまにし、背には五百箭ひゃくごの鞞ゆばと千箭ちせんの鞞ゆばとを負ひ、弓はずを振立て、劍の柄を取りしばかり、をたけびして其の故を詰り問ひ給ひき。日頃柔和

理想

温順にまします大神の、「此の度こそは國家の大事。」と思し召したればなるべし。

温良

勤勉にして平和なる生活を營むは、日本國民の理想とする所なり。温良にして人の非を咎めず、慈悲の

殉ず

徳海よりも廣きは、日本婦人の美點と稱せらる。されど非常なる變厄に際しては、身を棄て、難に殉ずる

かけまくも
畏し

も亦日本女子の意氣にあらずや。かけまくも畏けれ

典型

ども、皇祖天照大神は、げに日本女子の典型にてましますなり。

二 月雪花

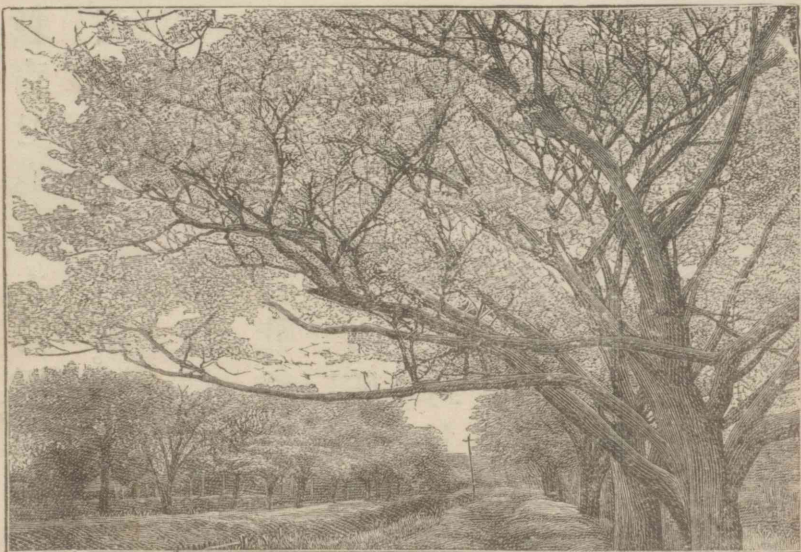
大宮人
雅興
童謠
風流

歴史的懷舊

春はハナミ、夏はスミミ、秋はツキミ、冬はユキミ。夏のミだけが、月雪花三つの眺に關係は無いが、夏の月の涼は又格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、同じく一般國民的の雅興である。「お月様いくつ。」の俚歌、「雪よふれく。」の童謠、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみこんで居るのである。

月雪花を見て感ずるのは、歴史的懷舊の念が添ふ

徑庭



花 (小 金 井 の ぼ ひ 櫻)

からである。我が國の櫻花は唐人も高麗人も美しいといふに違ないが、彼等の感ずる所と我が國民の感ずる所には、大きな徑庭がある。米國人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味をももつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で

詩的教育

教育せられた。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。

塵世

隱遁

皎々々々

利慾に營々たり

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて活動社會を離れることは隱遁者の所行であるが、少くとも皎々たる明月、皎々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對して、これを眺めて居る間は、如何なる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の効用は美術とおなじく、人を高尚にし、人を温雅にするのである。

我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、之を人事

人格

高尙

温雅

踏蹴

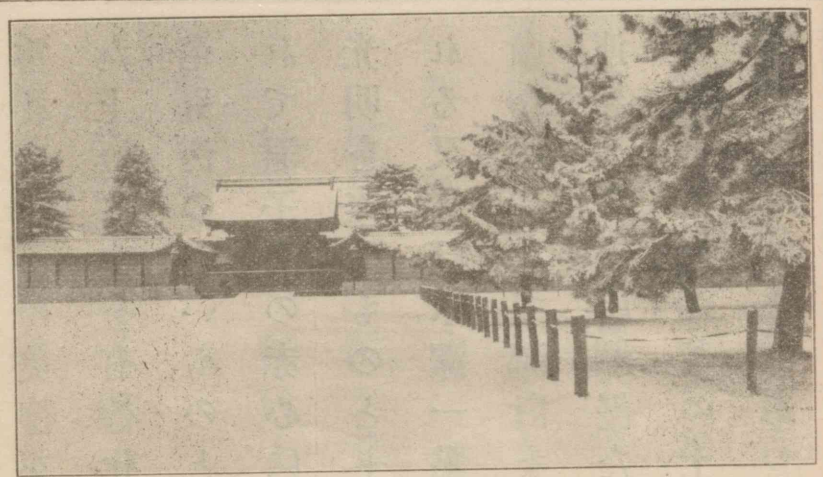
繁榮

隆昌

幸福

譬喩

吟詠



雪の京の御所

と結合した。高尚な人格は之を月雪花に譬へる。月に叢雲、花に風。月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の踏蹴や死去に譬へる。さうして繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべて此の譬喩法を用ひて居る。

我等は月雪花を尊敬し、月

有情化

有徳化

光風霽月

君子人

邪佞
なぞらふ

氷潔
嚴肅

節操

連想

節義

人

雪花に種々の美德を附加する。無情の物を有情化した上、更に之を有徳化するのである。月は公平無私、寸毫も汚のないものとして、光風霽月などと熟語せられて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲は其の光明を掩ふものとして、小人邪佞の徒になぞらへられる。又雪は氷潔一點の塵の無いことから、冷たい嚴肅な所を見て、潔白な精神や節操の動かないことを連想する。花は爛漫たる美しさの、忽ち風に散行くのを惜しんで、節義の士が身命を抛つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、此等の徳を備へて居るやう

(一) 姓は境。武蔵の人。群書類從の編者。文政四年(二四八一年)歿。七十六歳。

逸事

(二) 紫宸殿のこと。

に感ずるのである。古人がかく感じ來つた其のまゝ、を我等は承繼いて、我等もさう感ずるのである。月雪花を觀賞し得る吾等は幸福である。盲人の學者保己一の逸事として傳はつて居る話に、或時月明に對して、

花ならば探りても見ん今日の月

といつた。又京都に上つた時、御所の南殿(南殿)の櫻の花盛と聞いて、

目に見ねばせめてなでんの櫻かな

と戯れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも
なかくよしや雪のふじのね
といつた。

民族
傳説
品性
國民性
鬚髯
肉眼
心眼

月雪花の眺を恣にする事の出来ない民族は不幸である。月雪花があつても、之に附加せられた傳説の無い國民も亦人生の興味は尠い。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出来る。月雪花を通じて、我が國民の歴史は鬚髯として眼前に浮ぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見なかつたが、心眼を以ての

月雪花は眺め得たのである。

三 櫻のいろく

奈良櫻といふのは小輪の八重櫻で、莖は長く細く、優しい花である。昔一條院の御時、之を宮中へもつて來た。折ふし伊勢大輔が始めて參内したので、上東門院は件の花を伊勢の前に出され、檀紙、硯を其の前に置かせられた。人々何と回答するかと目を見合せて居ると、さらくと書いた歌、
いにしへの奈良の都の八重櫻

(一)第六十六代。
(二)歌人、伊勢祭主大中臣輔親の女。
(三)藤原道長の女、名は影子。一條天皇の中宮。

件

當意即妙
どよめく

(一)興福寺内にあ
る一院。

(二)奈良市にあ
り。齊明天皇
の三年藤原鎌
足創めて建
つ。

宿直

(三)近衛信尹。後
陽成天皇に仕
ふ。

(四)俳人。朝生軒、
織毫齋と稱
す。松江維舟
の門人。寛文
中歿す。

伺候す

今日九重に匂ひぬるかな

當意即妙に萬人感歎し、宮中どよめいたといふ。

又同じ御時とか、奈良の南圓堂(一)の前にあつた大き
な八重櫻を、天下の名花なれば、宮中に移し植ゑよう
と興福寺(二)に仰せ出されたが、僧徒等はなか／＼承知
せず、たとひ罪を得るとも、此の花外へはやらじと争
ふと聞し召され、衆徒の花を愛する心の優しきを感
じ給ひ、伊賀國館野(三)を寄せられ、花の頃は宿直して此
の花を護れと仰せられたといふ。

關白(三)三藐院殿(四)へ春可の伺候したとき、庭先の櫻が

やう／＼咲いたばかり、一句仕れとの仰に、

霞む目に通すやはりの絲櫻

といふに、さらば我もと關白

咲かぬまを待つやしんくの絲櫻。

京都の北山高野といふ所に、犬櫻がやう／＼咲き
かけたといふので、或人が見に行くと、

主目まだらにも咲きさかりたる犬櫻

折る人あらば足に噛みつけ

と花主が高札を建て、居る。其の人

鷹野には必ずつる、犬櫻

高札
鷹野

ひきをる人を咎めやはする

と詠んで一枝手折つた。花主さても風流の御方よとて、それから交際したが、翌年其の人が來た時には、花主ははや死んでしまつた。そこで其の人後を弔つて、

また來んと契りし花の主は早

今は此の世にいぬ櫻かな。

狂歌師(つたの)蔦細道(はそみち)、虎の尾の櫻を

虎の尾と呼べる櫻の花なれば

ゆきと散りても踏むを恐れよ。

東京上野の山に秋色櫻といふのがある。(二)秋といふ

(一)遠江の人。

(二)大目氏。江戸の人。享保十年(一七八五)、年五十七、(三)死。これは秋女十三歳の時の事。

娘、ある年父に伴なはれて上野の花見に行つたが、堂の側の井の傍に、酔客のよろめいて、あぶなげなのを見て、

井戸端の櫻あぶなし酒の酔

と口ずさんで、短冊にしたゝめて下枝に下げた。時の寛永寺の法親王は風雅の道を嗜まれて、枝にかゝつた短冊を一々取寄せて御覽になつたが、日頃の秀逸これに越したものは無いと、わざと秋女を呼出されて、賞賜もあつたといふ。今日九重の伊勢と新古相双ぶべき佳話である。

口ずさむ

(一)上野公園内。東叡山と號す。元和元年僧天海創建。徳川將軍家の菩提所たり。

風雅秀逸

佳話

四 渡 舟

坪内逍遙

あや織る

しだれ柳のかげひたす
 むらと村とのさかひ川。
 波があや織る土手際に、
 けふも人待つわたし守。
 雨の日、風の夜朝夕に
 渡呼びつゝ、来る人は、
 旅あきりどや、村の爺、
 町の女房、役場員、
 竿かたげたる魚釣や、

獵犬つれし若紳士、

西國巡禮、角兵衛獅子、

郵便配達、小荷駄馬、

なりも言葉もいろくが、

暫し乗合ふ舟の中、

知るも知らぬも知合うて、

語る間もなく向岸、

思ひ思ひにおりたちて、

西へ、東へ別れ行く。

行くを送れば又来る

西國巡禮

小荷駄馬

相手は日々に變れども、
 變らぬ流、おなじ主。
 岸の青柳、水の月、
 波間の鳥もなじみにて、
 春秋いくつ重ぬらん。

— 國語讀本 —

自修文

五 我が國の家庭

小さい兄や姉が、弟や妹を背負つて路端みちばたに遊んでゐるのは、我が國ではどこへ行つても見受ける事であるが、西洋では決して見られない。それを始めて見た或外國人が、

「何といふかはいらしい様子であらう。こゝに日本の美しい

國風が見える。」

美德
うつくしい道徳をそなへた性質。

日本の家庭
云々

日本の家庭だけに
 ある他よりすぐれた有様。

一端
かたはし。

東西
東洋と西洋、即ち世界中の意。

と言つて感心したさうである。すなほに親の言付いひつけを守るのは、日本の子供の美德である。兄や姉が自分よりも小さい弟や妹をかはいがつて世話をするのも、日本の子供の美德である。世話になつた弟や妹が、兄や姉を大切にすることも、日本の家庭の特色である。この西洋人は、くはしくは我が國の家庭の内部を知らなかつたのであらうが、路端の子供を見て、我が家庭の美德「父母ニ孝」兄弟ニ友」の一端を認め得たのである。

父母の子を愛する情は東西共に變りは無いが、日本の家庭では殊に子供を大切にす。家の貧富貴賤によつて、生活の上にはそれ〴〵の差別があつても、一體の風習は子供を大切にす。子供は父母の寶といふのみでなく、家の寶として尊重される。子が生れた時の父母の心は、家の後繼あとつぎが出来たのを喜び、家の益えき繁昌

七夜 子が生れてから七日目か
 因む よる。かたど
 命名する 名をつける。
 産土神 其の郷土を守つて居る神。
 七五三の祝 男子の三歳と五歳女子の三歳と七歳の三歳と十一歳十五日に行ふ祝。
 袴着 男子が五歳又七歳の時始めて袴を着ける時の儀式。
 帯の祝 女子が三歳五歳又は七歳の時始めて帯をつける時の儀式。
 ひたすら 一心に。
 傾ける 十分によろこびをつくす。
 知友 ともだち。

して行くのを祝ふのである。親族も朋友も皆同じ心で祝賀するのである。七夜までの中に名を附ける。行末はりつばな人になつて御國の爲にもなれ」と祖先の名に因んだり、めでたい語などを選んだりして命名する。三十二三日目には産土神にお宮参をして、誕生した事をお知らせする。三つ、五つ、七つと段々成長すれば、七五三の祝といつて、其の年々の十一月にお宮に参詣する風習もある。男の子の袴着の祝、女の子の帯の祝、父母はひたすら其の子の成長を楽しむのである。

三月三日の雛祭は女の子の節供、五月五日の端午は男の子の節供、一家中の歡喜は小さい子供等の爲に傾けられる。美しい雛人形、勇ましい鯉のぼり、かういふ楽しい日は年々に繰返されるのである。盆やお歳暮の贈物にも、父母は子供等を喜ばせようと苦心し、親類知友からも、お子様へと心をこめた品物を贈る。我が

愛撫する 優しくしめる。
 慰める 自分を慰める。
 系圖 祖先からのつづきを書いたもの。
 別家 或家族から分れて獨立した家。
 一人の子たる者 人の子たる者が父母を我が家の神とも我が身の子たる者が神とも我が心にいつくすこと大切にする。

國の都市ほど、おもちゃ屋の多い所はないといふのも、小さい國民をかはいがる國民の盛なことを證明する。

我が國の家庭には、お父さんもお母さんもお祖父さんもお祖母さんもいらつしやる。日本の子供は父母のいつくしみの外に、祖父や祖母の愛をも受ける。祖父や祖母は孫を愛撫して老を慰める。家の中には神棚があり、佛壇があつて、先祖の位牌を祀つてある。我が國の家は先祖からの家で、先祖と一緒に住んで居つて、だん／＼と子孫に傳はつて行くのである。家には家の系圖もあり、先祖から傳はつた品物もある。新しい家や別家した家には、さういふものの無い所もあるが、本家にさかのぼり、源を正せば、皆それがある。家には家の紋もある。

ちゝは、はゝは我が家の神我が神と
 心つくしていつけ人の子

(一) 國學の大家。伊勢松坂の人。享和元年(一八一七)卒。年七十。
大人 貴人や學者などをたつとん
あがめる たいまつとぶ。
か つましみ深い
對等 上下なく同等であること
先祖と同居 家の内には神棚なり佛壇なりのあるのでいふ。

(一)と本居宣長大人は歌はれた。父母は子等を家の寶と思ひ、子等は父母を家の神とあがめるのが、我が國古來の道である。親の親の世から傳へて來た道である。親しいなつかしい親愛の情に、貴い有難い敬愛の情が湧いて、父母に對しては神に對するやうなつつましやかな心持になるのである。それ故、言語動作にもそれが表れて來る。外國の家庭では親子、夫婦、兄弟、姉妹の間の言葉遣はすべて對等であるが、家の神と仕へ奉る父母に對しての言語は、もとより別でなければならぬ。先祖と同居してゐる我が國の家庭では、目上に對する言語と、目下に對する言語に明らかな差別がある。親代りに世話をしいたはつて下さる兄弟に對しても、敬語を使はなければならぬ。兄弟はあくまで幼少な弟妹をあはれみ、弟妹はどこまでも兄弟を目上の人とあがめ、兄弟仲よくして父母に仕へ、父母の心を慰めて、こゝに美しい楽しい家庭が成立

つのである。父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和スる家庭が存立するのである。

西洋人は「日本は子供の樂園である。」と言つて居る。日本は子供をかはいがる國である。」と西洋の讀本にも書いてある。我等がこの國に生れたのは、我等の幸である。

六 父の許へ

一筆申さふ今日けり父と極のり誕生の日なりけり
 ともよりも早起し顔をし洗ひ髪も結直し
 故郷のをけりわに何ぞそ心の中にし祝ひやと
 去年までけり膝下に居て皆極と一諸に祝

樂園 たのしいばし
よ。天國。パラダイス
(Paradise)
といふ英語を譯したもの。
パラダイスは神が天使と一緒に住んでゐるといふ。

ひ中とひが今年は其の事のかたはねを心苦く
あひととも學問にたす身には止むを得ぬ事
とあきらめ居ひ

身にこたへ

(致)

よかす

かく此側を離れ居ひうては尚更なかつて
此思のほどしみて身にこたへる日に一夜は
所寫真取出して此目にかゝるを樂しみに
致し朝食後取中ては今頃は宅のあのま
にさすわりなきし煙管をあのやうにして煙草
のふかす煙はすなごんと思ひまゐる夕飯の

(嬉)

(機嫌)

後には今頃はけやの休みなごうかかたと思ひ
出でくはいつか我が身も此側に居るかの思枝小
の友達が多けれども有親のそらひ居る人
は少く私に始終うらやましく居ひかくう
らやまらるゝにつけてもまじく嬉しく勉強
して居らるゝちにもふと郷里の事思ひいだ
しては即父と稱も母と稱も此様嬉しく
のらせらるゝこと何となく心丈夫になりて
勉強するにも張合が出来何れも成績を

たらしねの

形りて一言も申すたるとも譽にあつかり致と
勇み立ち此の程も修身の時に先より
明治天皇の御製

たらしねのみ親のをくあら玉の

とふまゝに身にぞくみける

とふまゝをぬりあけず落涙したる此の頃は

何となく時候も不順にう登ひは精しく養生

を命に息災してつくまても今日の御祝

ひつとけらけやうにと神おけて祈居る今

(承)

日は夜分に認むる苦のそとあまりのひな
アアアに課業がすむとすぐ書きつけ取
りあす御祝の詞のみ申どもかこ

月日

花子より

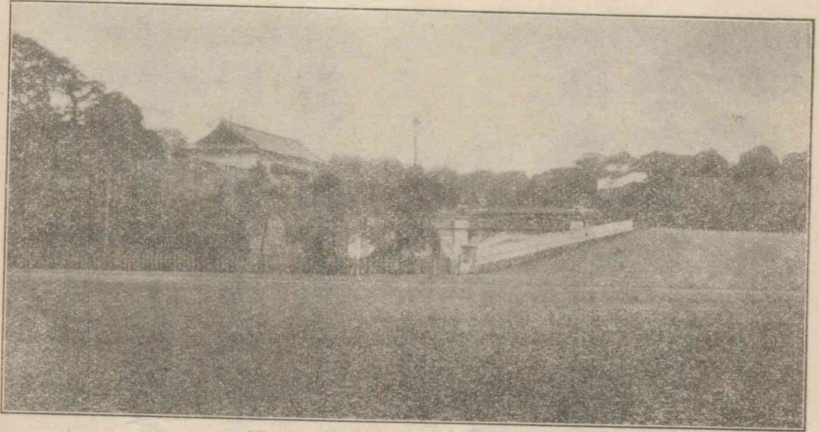
御父と様

御許に

尚ほ此の夜は取らぬまゝに母と福始の御様
は喜め給ねむし其の内に又アアとくべくひ

(無沙汰)

首都



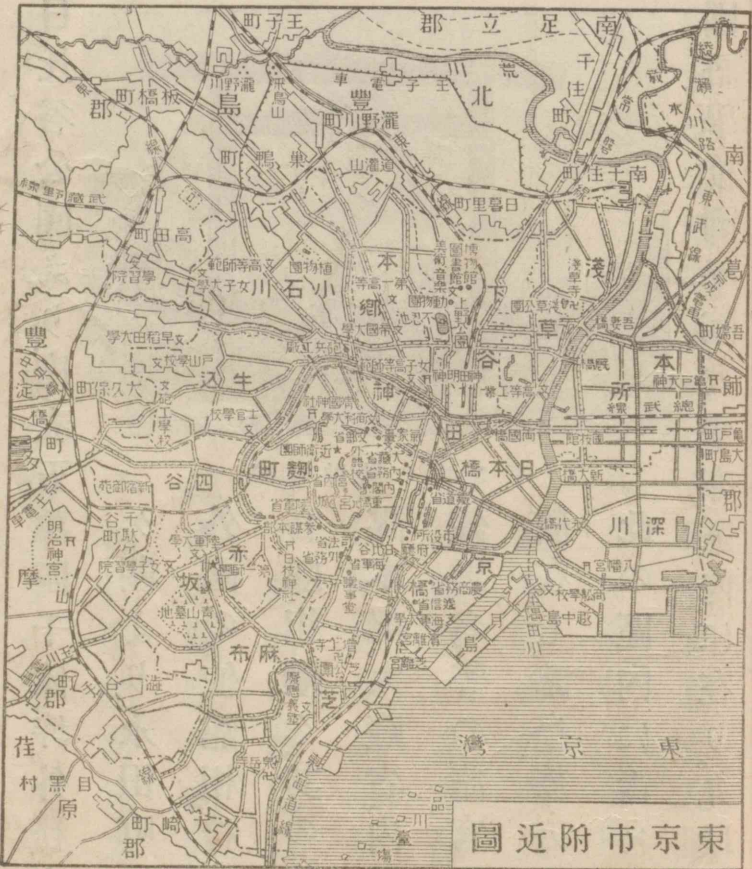
宮城二重橋

七 東京

大日本帝國の首都東京市は面積五方里、町數一千四百六十九、人口二百十七萬餘を數ふ。人口よりいへば、世界大都會の第五位に居る。

天皇陛下のいます宮城は市の中央に在り。二重橋外の廣場より、御堀を隔てて宮殿の御屋根を拜し奉る、莊嚴なる光景世

光景



東京市附近圖

出づれば、司法省、海軍省、外務省、霞ヶ關離宮、貴衆兩議

七 東京

二九

る光景世
界に比類
なし。
宮城の
周圍は麴
町區なり。
二重橋よ
り南して
櫻田門を

宏壯 廣袤 使館 官衙 散在す



靖國神社の大鳥居

院等の宏壯なる建築多し。海軍省、司法省と背中合に日比谷公園あり、廣袤五萬四千餘坪。外務省の附近霞ヶ關より永田町にかけては、外國の使館相接し、諸大臣の官邸相續く。其の他、陸軍省、參謀本部、大藏省、内務省、文部省、鐵道省等の諸官衙、皆區内に散在し、諸皇族方亦多く居を此の區内に占め給ふ。東京外國語學校、國學院大學亦區内に在り。九段坂の上には

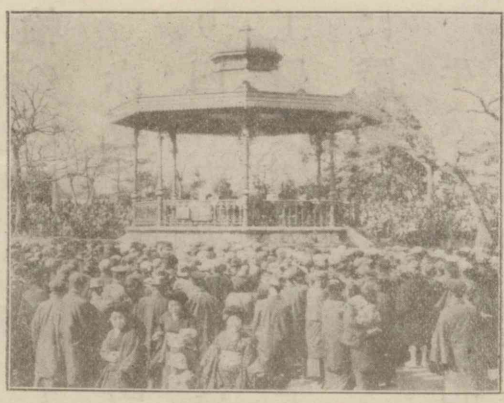
(一)別格官幣社。

國家に殉ず

(二)陸軍大將乃木希典。

齋きまつる

有名なる靖國神社あり、維新前後及び明治以後の戰役に、國家に殉じたる人々を祀れり。域内櫻樹多し。



日比谷公園音楽堂

翹町區の西南に赤坂區あり、青山離宮のある所なり。青山離宮は昭憲皇太后のいまし、所なり。離宮の附近に故乃木大將邸あり。離宮の西に當り、代々木の原に明治神宮あり、明治天皇並びに昭憲皇太后を齋きまつる。芝區は北翹町區に接し、西麻布區に隣して細長く

(一) 淨土宗の關東總本山と號す。三條長平中德川家康の修築せし廟所

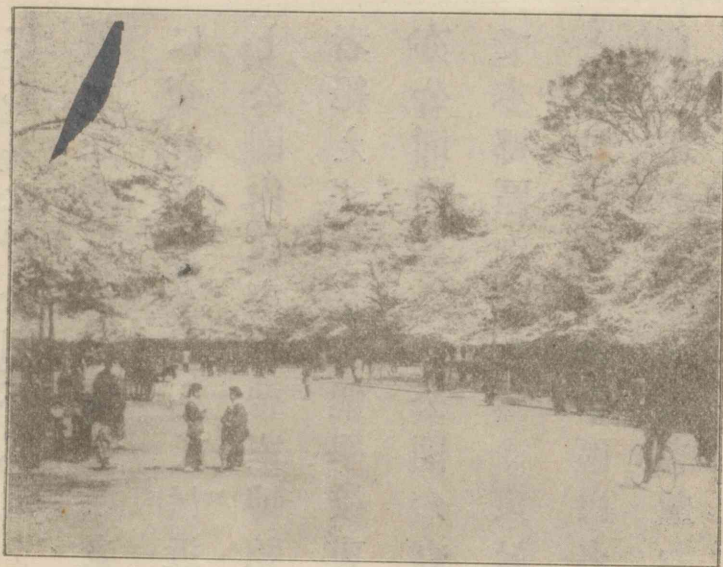
(二) 淨土宗。徳川家康の母水野氏傳通夫人の墓あり。
(三) 眞言宗。天和元年徳川氏の建立

南に延び、東宮御所、芝離宮あり。又慶應義塾大學あり。芝公園内の増上寺は、徳川氏の廟所として知られ、高輪の泉岳寺は、四十七士の墳墓を以て名高し。

赤坂區の北に四谷區あり。四谷區の北に牛込區あり。四谷、赤坂兩區に跨りて赤坂離宮、牛込區に陸軍砲工學校、陸軍士官學校等あり。早稻田大學は區の西北に隣接す。

牛込區の東と北とに連れる小石川區には、陸軍砲兵工廠あり。寺院の著名なるは傳通院、護國寺にして、學校には東京高等師範學校、日本女子大學校をはじ

め、盲學校、聾啞學校等あり。



上野公園の櫻

本郷區は小石川區の東にあり。東京帝國大學、第一高等學校等在りて、學生の住居するもの多し。東京女子高等師範學校は區の南部に在りて、校門の前の橋をお茶の水橋といふ。下谷區は本郷區の東

鬱蒼

にあり。上野公園、不忍池しのばずを以て名高し。上野公園は面積十九萬五千餘坪、長松老杉鬱蒼として、櫻樹其の間に交れり。惜しむらくは近年老樹の枯死するもの多し。公園内に東京帝室博物館、動物園あり、四時の遊覽者絶えず。東京音楽學校、東京美術學校、帝國圖書館等亦公園内にあり。公園の高地より、西は不忍池を隔てて本郷區を望むべく、東は下谷區の東半部と淺草區とを見下して、淺草區に名高き觀音堂をも指點すべく、又遙かに隅田川を望むべし。隅田川は市の東部を流れ、吾妻橋、既橋、兩國橋、新大橋、永代橋の五大橋を架

架す

(一)金龍山淺草寺の俗稱。天台宗。

中樞

(一)もと徳川氏の別園にして、濱御殿といふ。維新後隣地舊紀州邸を合せて離宮とせらる。

す。東京高等工業學校は既橋の近傍に在り、淺草區に屬す。川の東部なる本所、深川兩區には各種工場多し。商業の最も盛なるは日本橋區、京橋區にして、共に宮城の東方に當れり。京橋區の中樞ともいふべきは所謂銀座通にして、濱離宮、農商務省、逓信省、海軍大學等亦何れも本區内にあり。舊居留地には外國人の今尚住居するもの少からず。神田區も亦商業の盛なる所なり。區内に共立女子職業學校、東京商科大學等あり。神保町通には新古の書籍を商ふ店軒を並ぶ。

下り列車 帝都たる東京から地方へ行くのを下りといひ、地方から東京へ向つて行くの上りといふ。

(一) 常陸、磐城を通る線路。
 (二) 上野から青森に至る線路。
 (三) 武蔵野線。
 (四) 官幣大社。素戔嗚尊を祭る。
 (五) 音に聞いた名高いのでかねて聞いて居つた。
 (六) 利根川の異名。上野國利根郡文殊山に發し、下總國銚子に至りて海に注ぐ。
 (七) 下野國。黒髮山、赤龍山等の總稱。
 (八) 下野國那須郡の麓にある平野。東西六里、南北十餘里。
 (九) 那須野で狩をする勇士が背におうて居る矢のならびに居る手の上にあひを直して居る。霰が飛びまじつて居る男よんだのであつた。霰は、手にはめるもの。飛ぶものは、源頼朝の鎌倉三代將軍。源頼朝の子。那須野湯本の北に在る毒石。警城國西白河郡。春霞の立つのと共に都を出たが、白河の關へ來たらしく、秋風が吹く來たものか。因法師の歌。能く來たものか。因法師の歌。能く來たものか。因法師の歌。能く來たものか。

自修文

八 汽車の旅(一)

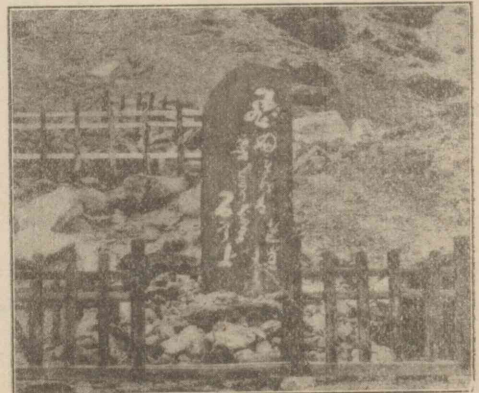
東京の上野停車場から青森行の下り列車に乗りました。仙臺までは水戸を通つて行く常磐線(一)の方が面白からうとも思ひましたが、やはり東北本線(二)の方を選びました。汽車の出発しようとする時、ちやうど一臺の飛行機が頭の上を通つて、東の方へかけつて行きました。埼玉縣廳の在る浦和(三)、米川神社の在る大宮(四)を経、栗橋の鐵橋を渡つて、音に聞いた阪東太郎(五)を越えて、間も無く宇都宮に着きました。こゝは栃木縣廳の在る所で、西の方に日光(六)の山が見えます。日光へ行くのには、こゝで乗替へるのです。宇都宮から北へ行くと、那須の平野へはいります。今は田や畠も開けましたが、昔は廣々とした野原であつたのでせう。
 ものゝふの矢なみつくろふ籠手(七)の上に

する勇士が背におうて居る矢のならびに居る手の上にあひを直して居る。霰が飛びまじつて居る男よんだのであつた。霰は、手にはめるもの。飛ぶものは、源頼朝の鎌倉三代將軍。源頼朝の子。那須野湯本の北に在る毒石。警城國西白河郡。春霞の立つのと共に都を出たが、白河の關へ來たらしく、秋風が吹く來たものか。因法師の歌。能く來たものか。因法師の歌。能く來たものか。因法師の歌。能く來たものか。



白河の關の址

霞たばしる那須のしの原
 といふ源實朝の歌や殺生石(一)の話など
 を思ひ出しました。
 白河(二)に着いては、



殺生石

都をば霞と共(四)に立ちしかど
 あき風ぞ吹く白河の關
 といふ歌から、昔の旅行の不便であつたことを思ひ、能因法師の苦計(五)もをかしく思ひました。こゝは今馬市で名高い所ださうです。

苦心したはか
法師は右の歌
を京都に居て
よんだ風にな
際、白くせ
ぬと、家にな
いので、居か
か、旅をして
奥州へ、居か
た、風に見せ
け、細く、半
に、さらし、年
ば、旅の、後
つ、旅の、半
ち、旅の、半
を、旅の、半
采、旅の、半
交、旅の、半
交、旅の、半
な、旅の、半
分、旅の、半
竹、旅の、半
氏、旅の、半
藤、旅の、半
代、旅の、半
仁、旅の、半
一、旅の、半
傳、旅の、半

郡山は磐越線との交叉點、福島縣廳のある福島は奥羽線の分岐點です。宮城縣廳のある仙臺に着いたのは、上野を出てから十時間の後でした。日本三景の一といふ松島はこゝから近いのですが、急ぎの旅ですから寄りません、歸りには見物したいと思つて居ます。ふと竹やぶに雀の(一)居るのから、舊城主伊達氏の事を思ひ出しました。



仙臺芭蕉社

あります。昔藤原氏が榮華を極めた所で、今中尊寺といふ古い寺がある(二)と聞きました。源義経は此の近所で討死したのです。盛岡は縣廳の所在地です。

(一)温泉場。

青森縣にはいつて、牧場に名高い三本木や七戸の附近を過ぎて、浅蟲のあたりへ出ると、始めて海岸を走つて、間もなく青森に着きました。上野を出てから僅かに二十三時間で四百五十七哩、埼玉、栃木、福島、宮城、巖手、青森の六縣を通つたのです。

九 眞の人

古き歌に、

人 多き人の中にも人はなし
人となれ人となせ人
といへるあり。天地の恵を受けて、人と生れ出でたる上は、誰しも人の中の人となりて、よき名を保たまほ

身分

俯しても
仰ぎても

門地

しきことなり。人の中の人となれとは、世に大いなる
勳を立て、後の世までも敬はるゝ身分となれといふ
のみにはあらず。其の心を直くし、其の行を正しくし
て、俯しても、仰ぎても、天にも地にも耻ぢぬ人となれ
といふなり。世には富貴にして、却りて心の貧しき人
あり、門地高き家に生れながら、其の行の極めて卑く
賤しきあり。身分門地の如何によらず、心の高く貴き
人をこそ眞の人とはいふなれ。

眞の人は我が身をも忘れて人の爲に盡さんと思
ふ。これ貴き心の外に現るゝなり。我が身一人よけれ

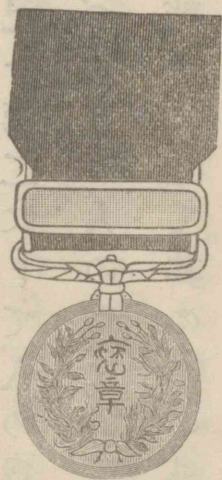
禽獸の心

犠牲的精神

ば、人は如何様にて構はずといふは、人にして禽獸
の心あるなり。親に對しての孝、夫に對しての貞、さて
は主人に對しての義理も、他人に對しての慈善も、皆
己を第二にして、人の爲に盡さんとする眞心より出
づるなり。人の爲に盡さんとする眞心は、即ち犠牲的
精神にして、其の心の外に現れたるは、即ち犠牲的行
爲なり。人の心としては、犠牲的精神より美しきはな
く、人の行としては、犠牲的行爲より貴きはなし。
人の危難に陥れるを見ては、我が身の危きをも忘
れて之を救はんとし、人の難儀に沈めるを見ては、我

はた

が身の困苦を物ともせず之を除かんと努むるは、唯此の美しき真心より出でて、此の貴き行爲となるなり。かゝる事例は古來尠からず、今の世にもはたいと多し。



紅綬褒章

明治十四年に褒章條例の制定あり。これは、此等の貴き人々を世に顯し知ら

綬

しめん爲なるべし。褒章には紅綬、綠綬、藍綬、紺綬の四種あり。紅綬褒章は自己の危難を顧ず、他人の命を救ひたる者に賜ひ、綠綬褒章は孝子、順孫、節婦、義僕、又は

模範

實業に精勵して衆人の模範となる者に賜ひ、藍綬褒章は學問、技藝上の發明、改良、著述、教育、衛生、慈善、防疫等の事業、學校、病院の建設、道路、橋梁、堤防等の修築、田野の開墾、森林の栽培、水産の繁殖、其の他一般農商工業の發達に關して著しき事績をなし、公衆の利益を興したる者に賜ひ、紺綬褒章は公益のため私財を寄附し、功績顯著なる者に賜ふなり。此の外、明治二十年には、別に黃綬褒章を定められて、海防事業の爲に獻金したる者にも賜ふこととなれり。多くの私財を抛ちて公衆の事業に盡すが如きは、

事績

海防

かよわき

富者ならてはなし難かるべし。然れども多くの善行は心がけ一つによりては、身貧しき人もなし難きにあらず。又かよわき一少女にても、出來得べからざるにあらず。事業の大小はしばらく言はず、常に人の爲に盡さんと思ふ真心だにあらば、其の真心はいつか外にあらはるべきなり。されば明治十四年以後、褒章を受けたる人々の數は、今日に於て既に數百人の多きに上り、其の中には身分卑く、家貧しき人も少からず。たとひ如何に卑き身分なりとも、此等の人々は皆人の中の人にして、誠に尊ぶべく、敬ふべきなり。

不義にして
富めりとも
何かせん

我等はもとより勉勵刻苦して、家を興し、産を殖さざるべからず。然れども、不義にして富めりとも何かせん。常に其の心を正直にして、眞の人たらんこそ望ましけれ。

一〇 小木曾つぎ女

小木曾つぎ女は、岐阜縣土岐郡曾木村の人なり。此の村は岐阜縣の模範村として、縣知事より表彰せられたる程なれば、村民大方質朴にして、勤儉貯蓄の風に富めり。

表彰す
質朴
勤儉貯蓄

誰彼の家

然るにつぎ女の父は少しも産業を治めず、家甚だ貧しければ、つぎ女は一箇年間學校に通ひたるのみにて、八歳の時よりは子守奉公に出されたり。かくて後は、近村の誰彼の家の下女奉公し居たるが、給金は父いつも前借し行きしかば、一厘半錢とても手に入りたる事なし。つぎ女は之を悲しむにあらざれども、我が年中の辛苦が、空しく父の一夜の酒代となるを思ひて、如何にもして、父の行を改めしめんと、心を碎かざる日なかりき。

心を碎く

従兄

折しも、長野なる某醫師の家に奉公せる従兄の許

水の泡

より、「我が仕ふる主人の家に女中の入用あり。良き主人にて、末の爲にもなるべし。心を決して來らずや。」と言越したり。つぎ女つくづく考ふるに、遠方にあらば給金の前借もかなはざるべく、年月の辛勞の水の泡となる事もなかるべしと、遂に意を決して其の言に従ひぬ。時に年二十なりき。

くまめくし

かくて主人大事とまめくしく立働きて、年二十圓の給金をば、成るべく使はぬやうにして預け置きしが、僅か二年餘の後に、凡そ四十圓ばかりの貯金を得、喜び勇みて故郷に歸れり。

境遇

家に歸れば、父は以前に變らぬ不身持にて、村民に爪弾せられ、何人も言を交へざる程のあはれなる境遇に居たりき。つぎ女は涙を流して父を諫め、携へ歸りし金を父の前に差出して、これを資本として、正業に就かせ給へ。と請ひぬ。

正業に就く

殊勝の志
さしもの
翻然

八歳の幼き時より、苦勞に苦勞をかけ、使はるゝだけ使ひしのみにて、かつて親らしきふるまひしたる事もなきに、只一心に親を思ふ真心より、年若き身のほしかるべき衣髪カミの飾ともせて、貯へ得たる金子を差出したる殊勝トクシヨウの志、さしもの父金作キンサクも、翻然ハツゼンとして

身の過を悔いぬ。

部落

をいしさを
けなげさ
名に負かず

金作はこれより生れ變りたる人の如く、朝は早くより、夜は遅くまで、専ら農業を勵みしかば、次第に家産も出來、村民の信用をも得て、後には一部落の組長にまで推さるゝに至れりといふ。少女心の一筋に父の非行を改め、家産を興さしめしを、しさ、けなげさ。曾木村はつぎ女を出したるのみにて、模範村の名に負かずといふべし。

一一 時計

起居行爲

我が部屋の文机の上に小さき置時計あり。形こそ
小さけれ、我に取りては此の上もなき寶なり。朝に夕
に我の最も親しむ友なり。毎日毎日我が起居行爲を
規則立たしむる眞の益友なり。

訓誡

四隣寂とし
て聲なし

ためらふ

とりわけ、夜の更行くまゝに、我は彼と相對して常
に訓誡を受くるを覺ゆ。彼の針の十時を指さす頃は、
四隣寂として聲なく、をりく、犬の遠吠を聞くのみ。
其の時彼は我に告げて、「日月の過ぐるは流るゝ水よ
りも疾く、しばらくもためらはずして過行くなり。友

よすがら

よ、我がごとく絶間なく勤めよ。夜は更けたれども、我
此處にあり。我はよすがら眠ることなし。」とさゝやく
が如し。讀書に心を奪はれて、何時しか彼あるを忘れ、
ふと思ひ出でて彼が面を見れば、いつしか十一時と
なれることもしばくなり。

チヨキ、チヨキといふ小さき音は、我が眠れる間も

休まず、翌朝我が起出づる時は、彼の長短二本の針は、
毎も縦に一字をなせり。それよりも遅れて目覺めし
日は、彼は我を誡めて、「今日はなど遅かりし。」と言ふが
如く覺ゆれば、心はづかしくて、終日快からぬなり。

(御變)

一二 舊師に贈る

一筆啓すとい追々暑々に向ひ申ひ交先きに
 はり夏となり候様もくせしれいり
 仰めたくまとい降つて私事と陰縁にて
 女學校に入学致しうてよりけや三月に相成小
 とも未だ一夜も缺席はせり遅刻も早
 退も致せり、となく先生の教を守りてよく
 進ぶより學び居ひは安心下り候は英語
 殊に起つて誠心骨が折れ今はややく懐
 けて其の日より日に後々ぬやうに相成申候

(慣)

(噲)

御詫ひかた
がた

校長先生申す諸先生方誠に親切に教
 へ下さり上級の方々は優しくおたけり下級
 同級生も心易く何事も察するやうの事、これ
 なく何事ものは合とあ居候様、井内様と
 學校の往復に誘ひ合ひの事、なによりありとも
 先生の指導のみ申居候、これ夏休に付、これ何
 ひ申すべくと樂み居候、先生は、無沙汰の詫
 かた、近況申しせ申す、かこ

一三 智慧伊豆

大町桂月

(一)川越の城主。寛文二年(一七二二)歿。年六十七。獨占す

老中

(二)天草一揆ともいふ。寛永十四年肥前國島原に起りし天主教徒の亂。

(三)三代將軍德川家光。(二二六)一)

智慧伊豆とは松平伊豆守信綱のことなり。其の伊豆守が智慧の名稱を獨占せるは、如何なる功業によるかと討ぬるに、格別の功業は無し。伊豆守は老中となりたり。されど老中となりたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。伊豆守は島原(二)の亂を平げたり。されど島原の亂を平げたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。されば智慧伊豆の名稱は何によりて得たるか。

或時將軍鷹狩して雲雀を多く獲たり。休息の際、將

軍之を味ははれんとす。急の事とて、老中ども雲雀を金串に刺して焼くに、火強く、手先熱して堪へられず、急げば急ぐほど早く焼けず、大いに困り居たり。伊豆守後れて來り、傍に木片あるを見出し、それに金串を刺して焼くに、火熱手に及ばず、やすく、と焼くを得たり。而も最も後に焼き始めし伊豆守が、最も早く焼き終へたり。他の老中ども舌を捲き、平日の勤はとて、も伊豆守に及ばず。かやうなる假初の事だにも仕負けたり。とて笑ひたりとぞ。これ一場の頓智なり。されどこれを以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非

舌を捲く
假初
頓智

(一)今の宮城の内堀に架したる橋。二重橋の東北。

(二)麴町區丸の内、大手外郭の南にあり。

馬場

ざるなり。或時將軍御堀にて小鷹狩ありしが、和田倉橋邊にて、堀の水鳥を追ひたてよと命ず。しかるに何處を見ても小石なし。伊豆守ふと側の店に蛤を賣り居るを見てこれを買取り、石の代りにしてこれを投げ、水鳥を追ひたてたり。これも一場の頓智なり。されどこれを以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

或時將軍朝鮮人の曲馬を覽んとて、八重洲河岸に馬場を構へさす。事急なり。土手を築かんはなし得ぬ

瞬く間

にはあらねど、忽ち築き忽ち取除くは無益なり。乃ち伊豆守の指圖にて、籠屋に命じて、數百千の竹籠を造らせ、其のうへに芝を置かしめければ、瞬く間に晴の馬場が出来たり。これも一場の頓智なり。されどこれを以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

逸話
枚舉に違あ
らず

(一)徳川秀忠
大事を託す
るに足る

以上の如き逸話は一々枚舉するに違あらず。少年時代の雀取の失策は有名なる話なれば、誰も聞知りたらん。二代將軍が「以て大事を託するに足る。」と感ぜられしも宜なりけり。此の一事以て伊豆守の人とな

請ふ……を見よ

りを知るべし。己は八裂にせらるるとも主君の過失を言はず。世にも頼もしき人なるかな。
智の有無は生れつきにもよれど、少年時代よりの心がけの如何にも由るなり。請ふ、伊豆守が如何にして智を得たるかを見よ。或人伊豆守に向つて、如何にして智を得たるかを問ふ。答へて曰く、「これ我一人の力にあらず。何人の智ももと格別の差なきものなり。若し我に智ありとせば、そは此の物のお蔭なり。」とて足を見せたり。其の足の甲に畏りだこ三つ四つあり。足の甲にたこあるは、正坐謹聽に慣れたればなり。伊

正坐謹聽

(一)大河内久綱。
(二)松平正綱。八二〇八
才覺

(三)二代將軍。二二九二
丸寢

豈……なかるべけんや

臨終發揮

豆守曰く、「我が實父も養父も、家康公、秀忠公に召使はれて、御才覺と御家法とをよくく存じたり。我は幼少の頃より、正坐して實父、養父の教を謹聽せり。秀忠公、家光公の御側に晝夜相勤めたり。御次に丸寢して、段々承ることを考へに考へたり。かくて足にはたこが出来たり、心には才覺が出来たり。」と。嗚呼、伊豆守の智慧は正坐謹聽の賜なり。今の世の少年少女たるもの、豈伊豆守の足だこに就いて學ぶ所なかるべけんや。
伊豆守の臨終は、殊によく智慧伊豆の實を發揮せ

(一)徳川家綱。(二)三〇一—二三四〇

けるぞや

鼻にかく

ゆゝしき事

り。伊豆守病んで將に死なんとせし時、三代將軍と四代將軍とより賜へる親筆の書を悉く取出させ、之を新しき薬研に入れて焼かせたり。而して我が身と共に埋めよと遺言したり。何が故に伊豆守は將軍の書を焼きけるぞや。其の中には世間に洩すべからざる秘密の事もありしならん。されど多くは伊豆守の功を褒めたるものなるべし。子孫若し之を鼻にかくることあらば、ゆゝしき事なり。故に一切之を焼きたり。我が身の死すると共に、我と我が功を自ら没したり。嗚呼、これ智慧伊豆が智慧に相應する功業の世

世のつね
世のつね
ちり

に現れざる所以なり。而して又智慧伊豆の智慧伊豆たる所以なり。

一四 紅花と白百合

一 紅花

幸田露伴

紅の花は、人の園に養ひ鉢に植ゑたるをば見ねど、姿優しく色美しく、世のつねの人々の愛で喜ぶ草花なんどにも劣るべくはあらぬものなり。人は花の大きからねば、眼ざましからずともてはやさぬにや、香の無ければゆかしくもあらずとて顧ぬにや。花

はかなげ

は其の形の大きくて香の高きをのみ愛すべきものは。此の花おほよそは薊に似て、薊のやうに鬼々しからず。色の赤さも薊の紫がかりたるに似て、や、黄ばみたれば、卑しげならず。葉の淺翠なるもよく映り



紅あひて美しく、一體の姿のかのよわく物はかなげなるまこ花とにあはれ深し。べには此の

花より取るものなれど、此の花のみにては色を出さず、梅の酸にあひて始めて紅の色の成るなり。いまだこの事を知らざりし折、庭の中にいさゝかこの花を

生し立てしが、その紅の色の濃からぬを訝しみつゝ、朝な夕な疑の眼を張りて打ちまもりたりしをかしさ、今に忘れず。

二 白百合

徳富蘆花

宵の明星

後山山腹の茅青々と茂れる中に、宵の明星の如く一點兩點、山百合の花白み初めしと思へば、何時か此處にも開き、彼處にも笑み、今は中夜の星よりも多くなりぬ。

中夜の星

山に登りて花を訪へば、花は茅深きなかに潜みて、容易に見難し。歸りて吾が庭に立ちて眺むれば、花は

茅より秀でてほゝゑめるさまなり。

朝露山に満つる頃は、花もうつとりと眠げなり。

夕風そよ吹きて、満山の茅うねくと青波をうた

す時は、花も波のまにくく漂ひて、さながら水の上な

る藻の花のゆらぐとも見ゆるなり。

日落ちて、山闇うなり行く時、點々として花のみ白

う暮残る様いとあはれなり。

—自然と人生—

自修文

一五 花の傳説

一 桃

(一)神武天皇より
も前の時代。
天照大御神や
(二)素戔嗚神の御
父。

(一)神代(二)昔伊弉諾の神が、お妃の伊弉册の女神を追つて、死人の

行く夜見の國へ行かれた時のことである。男神は美しい女神の

お姿が、まるで變つておしまひになつ

たので、愛想をつかして逃げて歸らう

となさると、女神は女の鬼どもに、男神

のお後をお追はせになつた。男神はお

困りになつて、頭に結んだ葡萄の蔓の

髪飾をお投げになると、葡萄の實がな

つた。鬼がそれを拾つて食べてゐる中

に、神はどんくお逃げになつた。鬼が

又追つかけて來ると、今度は鬢に挿し

た櫛をぬいて、一本一本齒を缺いて投

げられると、笄が生えた。鬼がそれを抜いて食べてゐる中に、又お

逃げになつた。とうく(一)娑婆と冥土の境まで來た時、ふと見ると、



(村賀多郡名津國路淡)社神諾伊社大幣官

(一)此の世の中。
(二)死んだ者の行
くといふ國。

そこに大きな桃の木があつて、實が一杯なつてゐた。神は此の樹の上にお上りになつて、押寄せてくる鬼の軍勢に向ひ、桃の實を取つてはおぶつけになると、鬼は閉口して逃げて行つた。桃の實をおぶつけて悪い鬼を拂ふといふ事は、これから始つたといふ。

二 紫苑

昔支那の國に、親孝行な二人の兄弟があつた。父親に別れてから二人は悲しんで、明けても暮れても墓のほとりて泣いてゐた。けれども何時までもさうしてゐては、家業が廢つてしまつて、つまりは父にも不孝だと思ひ返したので、兄は或日墓の傍に忘草を植ゑて、長い間の悲みをふつつりと忘れてしまひ、明くる日から役所に勤めて、毎日の仕事に精を出した。けれども弟は兄の仕方を薄情だと怨んで、自分は兄とは反對に、永く忘れない心のしるしにされてゐる紫苑の花を墓の傍に植ゑて、自分は何時まで

永く忘れない云々
紫苑を植ゑておけば永く忘れないといはれて居たのである。

靈驗
あらたかなし
未來
これから先の

England.
France.

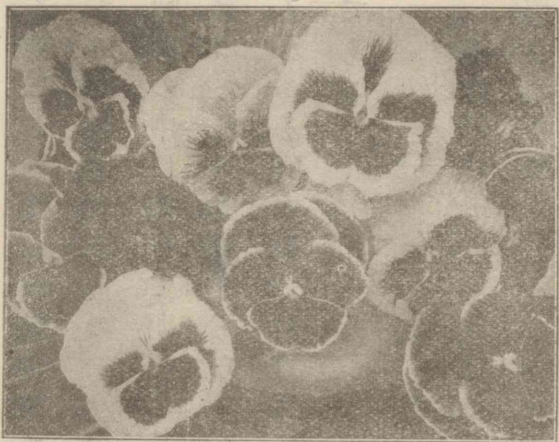
三位一體
キリスト教で父(天帝)と子(キリスト)と聖靈の三つは實は同一物であるといふこと。三位一體の神様とは即ちキリストに謂ふ神。

も父の慈愛を忘れまいと誓つた。さて或日、いつもの通り墓へ行つて泣いてゐると、墓の中から聲が聞えて、わたしはこの墓を守る鬼だが、神様が、お前のやさしい心をかはいさうに思し召し、わたしに命じてお前の一生の福をお守らせになつた。此の後は毎晩夢の中に現れて、明日の日の事を前以てお前に教へてやる。と言つた。其の靈驗であらうか、それから此の弟は未來の事のおくわかる國中第一の賢人になつて、幸福に世の中を送つたさうである。

三 三色堇

英吉利の田舎では、三色堇の事を、少女たちが、一つ頭巾の三つ面さんと呼んでゐるが、佛蘭西の田舎では、同じ草を少女たちが、三位一體の草といつてゐる。昔此の花は、其の色の美しいばかりでなく、香氣までが高くつて、姉妹の堇の花も及ばない程であつ

たから、毎年春になつて、麥畑の間からこの花が咲出すと、誰も彼も我勝に畑に入つて、花を摘取つて行くので、夏になつても、麥畑



三色堇

まつた代り、其の年からは麥畑に澤山の實入があつたといふ。

には一粒の麥の取入もなかつた。それを優しい心の三色堇が大層悲しみ、天にいます三位一體の神様にお祈をして、自分の美しい色はともかく、せめて多くの人の心を惹く高い香氣だけでも、お取りになつて下さいと願つた。それからは三色堇には、もうたゞの堇の花のやうな香氣がなくなつてし

一六 海王國の婦人

肝付兼行

純粹

雲泥の相違

一斑

(1) ニュージール
ランド
New Zealand

我が國と英吉利とは純粹なる海國で、東西相對して世界に類稀なる國であります。此の兩國の風俗習慣を比べますと、實に雲泥の相違を發見致します。こゝに壯快な話がありますから、其の御話をして、かれの習慣風俗の一斑を窺ふことに致しませう。我が國より南少し東へ、約四千五百哩を隔てて、南緯三十四度から、四十八度の邊に達する一つの島國があります。此の島國は南島、北島に分れて、英吉利の殖民地でありますから、其の風俗も全くの英吉利風

て、國人は一般に海軍を重んじ、海軍士官を貴びます。明治十八年の事でしたが、練習艦筑波が遠洋航海をして此の地に参り、北島の或港に寄りました時、其の地の人民は我が海國士官を非常に優待しました。市會の議長、議員等は、其の夫人、令嬢と共に百事に周旋し、我が士官を饗應するに、日も又足らずといふ有様でありました。加ふるに市長は、少し隔つた海岸に温泉の出る別荘を所有して居るに任せ、是非其の地へ船を廻して遊べとの勸でありました。そこで我が艦長は、せつかくの厚意を辭するに由なく、廻航の約

優待

周旋

饗應

日も

又

足

らず

い

ふ

有

選りに選る

Port



ニューロンドン府首のドンラージュ

束をしましたが、其の翌日突然公命の電報が参つて、俄に港を出發する事になりました。それ故約束に背く申譯、且は過日來の待遇に對する謝辭と離別の辭を述べさせる爲に、總員の代表者として、一士官をポートに乘せて出しました。然るに、當日は海が荒れてゐた故、漕手をば乗組三
百名の中から選りに選つて遣りました。此の穩ならぬ海上を、我がポートと行違に、陸の方から本艦を目

いぶかし

舷梯

何ぞ圖らん

抜錨

(一)名は品之允。
感に打たる

ぎして、一小船に帆を揚げ、白波を蹴立てて快走して
来るものがあります。そこで我が艦員はいぶかしく
思つて見て居りましたが、やがて本艦に着して、舷梯
を上り、舷門にはいつて来るのを見ますれば、何ぞ圖
らん、前日の饗應に周旋した貴婦人、令嬢たちではあ
りませんか。まして其の乗組總員八名、一人の男子を
も交ぜないとは、實に意外でした。これは新聞紙で我
が軍艦抜錨の報を見て、告別の意を表せんが爲に來
たのであります。

これは、當時の艦長であつた、有地中將の、感に打た

Anglo-Saxons
英國人のこと

決して偶然
にあらず

長大息

れての物語であります。女子に此の勇氣があればこ
そ、^(一)アングロ・サクソン民族が三億八千萬の人民を支
配して、其の領土に日没を見ないのであります。英國
の今日あるは、決して偶然ではありません。我が國の
一般婦人の風と比べましたならば、皆様はどんなお
感じが浮びますか。私は長大息の外ありません。

一七 汝の母より 姉崎正治

今次の世界大戦に於て、英吉利の一飛行士官が、敵
たる獨逸の飛行機を射落した時の事である。彼は敵

Dutchland

塹壕

飛翔す

Pocket

一葉

機の地に落ちるのを見ると共に、其に乗組んで居る敵兵の事を思ひ、敵の塹壕前ながら、敵機の跡を追うて着陸した。敵機は翼を折つて破れ、乗組士官の體は地に横たはつて、呼吸は既に絶えて居た。敵ながら今まで空中に飛翔して居た人の事を思ひ、物の哀れを覺えて、其の死體を片附けてやらうと、胸のポケットの邊にさはると、其所に堅い物があつた。之を搜り出して見ると一葉の寫眞で、それには「汝の母」と書いてある。即ち今戦死した士官は、空中戦にも常にポケットに母の寫眞を藏して居たのを見て、其の士官は一

齎す

武運強く

層の哀れに堪へず、まづ敵の屍體を味方の塹壕に齎し、再び自分の機に乗じて尙一戦した。其の日の戦にも武運強く、安全に味方の戦線の後に歸つた。

其の後英吉利士官は、此の射殺した敵と其の老母の事を思ひ、それにつけて自分の身の上、且は早くに亡くなつた自分の母の事を考へ、感慨に堪へず、敵士官の姓名を辿つて、彼が母へ一書を送つた。其の書面は左の如くである。

「自分は英吉利の飛行士官です。何月何日、私は敵たる獨逸の一飛行機を射落しましたが、其の敵兵

は死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏して居たのを發見し、其の母御たるあなたに此の手紙を差出します。

私はあなたの御子息を殺しました。併し其の人を憎んだのでもなければ、其の人の母御たるあなたのお悲みを知らない筈もないのです。唯戦争といふ残忍な仕事に於て、此は私の義務でした。敵士官即ちあなたの御子息が、味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、其の結果、味方は反對に攻撃を受けて、幾人かの兵は、其の爲に命を失

残忍

偵察す

敬意を表す

無量の感

つたでせう。此の不幸を防ぐ爲、私は敵機を射落しました。其の乗組士官の身體に敬意を表し、其を片付けようとする時に、其の人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。私は子供の時に母を喪ひ、今でも人に母親があるのを見て、羨しく思ふのですが、私の殺した敵士官には、あなたといふいとしの母親があり、死ぬまで其の寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分はいつとしては居られません。殺した私の手紙を見れば、口惜しくも思はれませうが、私としては、彼の

人の母御に對して、恰も自分の母に對するやうな親しい感じを、悲の中にも禁じ得ません。

私が彼の人を殺したのは、戦争といふ残忍な悪魔のした事です。あなたも、又亡くなつたあなたの御子息も、此の事を思つて、私の殺人を赦して下さるでせう。而して又彼の人を亡くなつた代りに、私は一人の母を得たやうな思のあるのを察して下さるでせう。今私の書く此の手紙は、彼の人と私と二人の魂が、一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこれ以上には書けません。涙で眼は曇り、筆

中立國

を執る手も震へて書けません。」

此の手紙は英吉利軍の本營から、中立國の手を経て、獨逸國內の宛名の人に届いた。一人の兒を喪つた母が之を讀んだ時の感は、思ふも涙の種である。さうして此の婦人は、數日の後長い手紙を書いて彼の英吉利士官へ送つた。其の大意は下の如くであつた。

「御手紙の着く前に、悴の戦死は知つて居りましたが、其の戦死の相手たるあなたの情深い御手紙を見た時の私の思は御察し下さい。通常ならば、あなたを悴の仇敵といふ所ですが、御述懐に接して

述懐

蘇生

は、其の仇敵が反つて忤の蘇生となつて、此の母に手紙を寄せてくれたやうに思へます。あなたが忤の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたの御手紙は、私にとつては戦死した忤の手紙としか思はれません。あなたは忤を殺したといはれ、又事實其の通りに違ない事は勿論知つて居ますが、殺すも殺されるも、共に各の國の爲で、人として何等の怨も仇もある譯のない事は、お互に明白の事でせう。其の怨もない者が互に殺さうとするのは、畢竟は戦

畢竟

争の爲ですが、此に就いては、私は何も申しませぬ。唯仇といふべきあなたが私を母の如く思ひ、私も亦あなたが死んだ忤の身代りのやうに思へるのは、何たる不思議の事でせう。

私には三人の男子があり、戦死したのは其の末子ですが、兄二人もやはり戦線に出て居て、何時弟と同じ運命になるとも計られませぬ。併し私は末子の戦死した爲に、あなたといふ新な子を得ました。戦争が濟み平和の時が來、而して兄二人も無事に歸ることがあれば、私はあなたにも此の家へ一

度來て戴きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。其の時には、あなたは、死んだ悴とあなたと二人分の子として弟として、私の家庭にいつまでも滞在して戴きたい。其の日の早く來らんことを神に祈ります。而して最後には「汝の母」と彼の寫眞に書いてある通りに書いてあつた。

此の事實だけで十分である。一々註釋を要しない。人情の美は、眞心によりて此の如く結び附くものである。

— 光あれ —

(一) 惠那郡。岐阜市の東二十二里

青磁
逸品
稱ふ

一八 荻山直女下婢の過失を救ふ

直女は美濃岩村藩の老臣荻山某の女なり。才あり、智あり、仁慈の心特に深かりき。

直女の父盆栽を好みて、多くの奇樹珍木を蒐めけるが、中にも青磁の鉢に栽ゑたる梅の古木、其の器、其の樹と俱に天下の逸品として、自らも誇り、人も稱ふる所なりき。

一日、年若き婢女、庭に出でて、盆栽に水を灑ぎゐたるに、飼犬の赤來りて、裾にまつはり、袖にじやれつく

憂然

に、婢女は戯に「しつ、しつ。」と言ひつゝ、軽く逐へば、赤走せ去りて振向き様、一聲「ワン」と吠えて、又飛びきたる。婢女をほも「しつ、しつ。」と叱りつゝ、小石をひろひてちやうと投付けたるに、其の石はたと腰掛臺の角に當りて、横に逸るゝ途端、忽ち憂然として響あり、哀れ青磁の鉢は二つになりて、左右に割れたり。婢女見てあなやと驚き、鉢を見詰しまゝ、呆れて立ちけるが、やがて我に返ると齊しく、一聲高く「わつ。」と泣出しぬ。

直女時に縁側に在りて、繪本を披き見つゝ、ありしが、婢女の泣聲を聞ききて、訝りつゝ、庭に降りて、傍に進

我を忘る

粗忽

途方に暮る

出仕

み寄る。忽ち目に留りしは青磁の鉢。餘りの事に我を忘れて、其の故を詰り問へば、婢女泣くく、仔細を語り、如何に粗忽とは申せ、世にも稀なる御品を壊し候りては、死すとも其の罪を贖ひ難し。如何にせば宜しきやらんと、唯々途方に暮れ候ひぬ。」と述べ、顔を掩ひて、又さめぐと泣く。直女聽きて心に憐み、首傾けて、何事をか思案すること少時。やがて「安心せよ。わらは善き様に計らはん。」と言ひて、婢女を誡め去らしむ。

折しも父は出仕して家に在らず、夕刻に至りて歸り來り、晚餐終りて後、直女を相手に、いと機嫌よげに

莞爾

笑ひ興ず。直女は父が最愛の女なり。父は愛敬滴るばかりなる直女の顔を覗きて、「嬢よ。其方は父が大切の娘ぞ。」と言ひつゝ、頭を撫づ。直女は眞珠の如き眼を張りて、ちつと父の顔を見上げ、「さやうにてはおはすまじ。わらはよりは青磁の鉢こそ御大切におはすべけれ。」と言ひつゝ、莞爾と笑む。父はからくゝと笑ひ、「何とてさやうの事あらん。」と言へば、直女「さらば彼の鉢わらはに賜はり候ひなんや。」と言出づ。父は幾度か打ちうなづき、「おゝゝゝ、其方の望むものは、何にても取らすべし。」とて、益機嫌よし。今は心安し。直女後へに侍る

にじり出づ

婢女を見返りて、それ早くお詫を申せ。」と言へば、婢女恐るゝにじり出で、両手を突き、頭を下ぐ。直女傍より共に詫ぶれば、父ははたと膝を拍ちつゝ、「さてはこれなる女め、青磁の鉢を壊せしよな。好し好し、此度は赦し遣らん。」と告げ、前に平伏せる婢女を見遣りて、「其方はよき主人を持ちて仕合せぞ。以來よく能く氣をつけよ。」と戒めしばかり、復其の罪を問はず。婢女嬉涙に咽びつゝ、幾回か主人を拜し、直女を拜すれば、直女亦嬉しさ餘りて、わつと泣崩る。直女時に年十三ばかりなりき。

熊田葦城の文による

一九 花えらみ

武島羽衣

少女「机の上に生けおきて、

朝な夕なにうちながめ

心の鑑となさんには、

いつれの花かよかるべき。」

薔薇「わがあざやかな色を見よ。

わがかんばしき香をばかけ。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

少女「色はありとも、香ありとも、

花のうしろに刺もちて、

人さすごときそなたをば、

いかで鑑になさるべき。」

朝顔「あしたあしたに疾く起きて、

怠る日なきわれを見よ。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

少女「身は怠らずつとむとも、

朝日さすまも待ちかねて、

しほむがごときそなたをば、

いかで鑑になさるべき。」

蓮 「泥の中より出づれども、

清きはわれが姿なり。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

(一)「はちすばの
にどりに染ま
ぬ心もて、何
かは露を玉と
あざむく。」
(古今集、僧正
通昭)

少女「清き姿はありとても、

露をば玉と見せかけて、

欺くごときそなたをば、

いかで鑑になさるべき。」

櫻 「われが心は愛らしく、

われがかたちはしな高し。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

〔一〕「ちらく」と
のどけき春の
心より、には
ひ出でたる山
櫻花（賀茂
真淵）

少女「のどけき春のま中より、

にほひいでたる櫻花。

げにおくゆかし、そなたこそ

わが朝夕の鑑なれ。」

かくて少女は花蔭に、

よりて手折れる一枝を、

机の上の水入に、

さしてぞひとりながめける。

——續花紅葉——

二〇 須磨日記

坪内逍遙

七月十一日 須磨の叔母様の許へ行くとして、姉様と
京都より汽車に乗る。空晴れて暑き日なり。神戸よ
り先は海見えて、沖には白帆の行違ふ様、繪のやう
なり。其のうちに驛夫が「須磨、須磨」と呼ぶ。叔母様の
お宅はステーションよりぢきなり。あれ、屋根が見
える。「それ、門が見える。」といふうちに着く。叔父様、
叔母様も、よう來た、よう來た。」と幾たびも仰せられ

[Station]

たり。

十二日 朝、叔母様、姉様と一緒に、海濱を歩いて貝を拾ひ、用水池、月見の松の邊まで行きて還る。姉様と貝にておはじきをして遊ぶ。

十三日 朝、姉様と庭を掃く。

夕がた涼しくなりて、叔母様、姉様と三人にて須磨寺に詣づ。まづ敦盛(一)の首塚といふを見る。此の寺にはいろくくの寶物あり。須磨寺の隣に源光寺といふがあり。その石ぶみに、

見渡せば眺むれば見れば須磨の秋

(一) 福祥寺の一名。
(二) 平經盛の子。無官大夫といふ。元暦元年(一一八四)一の谷の戦に熊谷直實に討たる。年十六。

石ぶみ

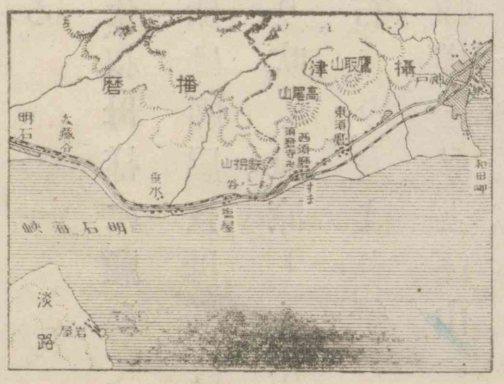
(一) 姓は松尾。伊賀國の人。有名人なる伊人。元祿七年(一七〇二)三十四(二)年五十一(三)歿。

と書いてあり。これは芭蕉(一)といふ人の句なり。」と、叔母様仰せられき。

それより程遠からざる路守川の邊まで行き、平家蟹二疋つかまへて還る。夜は此のあたり螢多く出づる由。

十四日 今日も朝疾く起きたり。姉様と連立ちて、海邊へ行く。

跣になりて、わざと波に洗はす。ちよろちよるとはひ來る波、さながら生きてゐるやうなり。和泉の山



壇浦
屋島

さながら

御料林

山、淡路の島など、姉様指さして教へ給ふ。また貝を拾ひ、暑くならぬうちにとて、後の御料林の中を歸る。

紗の螢籠

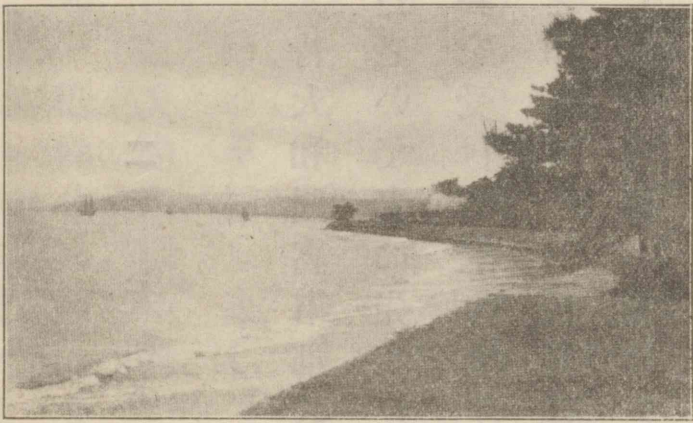
夜、叔母様に願ひて、路守川の邊まで螢狩に行く。姉様は團扇、叔母様は紗の螢籠、私の持ちしは笹竹なり。吹く風涼しく、川の上、橋のほとり、葦の中、草の蔭、右より、左より、螢の飛びちがふ様、誠に美し。姉様と私と澤山の螢をとり、叔母様は籠に入る、お役目忙しき程にて、此のやうなる面白き事は無かりき。

十五日 雷雨。閉籠りて外へは出でず。京都の友達の

許へ手紙を書く。姉様、側よりのぞき見て、「をかしき事を書く子よ。」とて笑ひ給ふ。姉様とおはじきして遊びし事、螢狩の事など書きたれば。

十六日 明日歸る筈ゆゑ、今

日は叔母様、姉様と町へ行き、土産物を買ふ。松露の罐詰二つ、貝細工の簪二本。



須磨の海岸

罐詰

此の夜遅くまで話す。

—國語讀本—

翁

二一 大和の孝子と芭蕉翁

吉岡 郷甫

先だつ

炊く

昔大和國高市郡武内村に貧しい百姓がありまし
た。老いて妻に先だたれ、一人の娘と一人の息子との
養を受けて居りました。娘はお今といひ、弟は長兵衛
と申しました。長兵衛は少しばかりの田地を耕して
しまへば、桶の糞替たがをなし、お今は他家へ下女奉公に
出て居りました。長兵衛は毎朝早く起き、飯を炊いて

拵ふ

父にすゝめ、朝飯後、村中を廻つて桶の糞を替へ、晝飯
に歸ります。まづ父にいろくゝの物を調へて馳走を
致し、撫で摩り、世間話などして慰め、午後は又仕事に
出で、夕方歸り、夕飯を拵へて父を饗します。おしい
ものは父にさゝげ、自分はいつも粗末なものばかり
いたゞいて居ります。

人一倍

姉の孝行も決してこれに劣りません。他家に奉公
をして、勤に暇の無い身でありますけれども、仕事を
人一倍餘分に致しまして、朝夕少しづつの暇を貰ひ、
十町ばかりの道を走つて、實家に歸つて孝養を致し

色に先だちて意を承く

ます。暑い時には團扇で扇ぎ、寒い時には柴を焚いて温め、背を摩り脚を揉み、所謂色に先だちて意を承くるで、痒い所に手の届くやうにして上げます。貧しき中にも父はかやうな姉弟を子に持つて、朝夕行届いた孝養を受ける其の喜は如何ばかりでありました。こそなけれ、平和の光はいつも三人の頭上に輝いて居りました。

水も入らぬ

生憎

然るに、如何なる邪神の悪戯でありましたらうか、或年疫病がはやりまして、大事な父が生憎其の病に

足らはぬ中

百方

罹りました。姉弟は大いに驚き、足らはぬ中にも醫師を迎へて、百方治療看護を盡しましたが、一向に其の

夜の目も合はず、帯紐解かず



松尾芭蕉

験が見えませぬ。唯悪くなる一方なので、二人は心配して夜の目も合はず、帯紐解かず、ひたすら介抱致して居ります。ところが、此の疫病には鰻の黒焼が大妙薬だといふ事を聞きました。二人は大喜いたし、たもの、それを手に入れる道がありません。二人は代るく、介抱の際を見計らつて、谷川に行つて鰻

痛心

さしもの難症
拭つたやう

神明の感應

を捜しますけれども、どうしても見當りません。姉弟は大いに痛心して、力をおとして居りました。或夜お今が川にまゐつて水を汲んで歸りますと、途中で、其の水桶の中で、がぶりと音がしました。何であらうかと怪しみながら、急ぎ歸つて見ますと、不思議や、大きな鰻が泳いで居りました。姉弟の喜は一通りでなく、早速黒焼を作つて、父に用ひさせました。すると、さしもの難症が、拭つたやうによくになりました。

二人の孝行が段々に世に知れ渡り、鰻の事も神明の感應だと評判高くなりまして、終に藩侯の耳に入り、金や米を褒美として賜はりました。

(一)東山天皇の御代。
俳句の大宗匠

とある

とある

時は元祿(一)の頃でありました。當時有名な俳句の大宗匠といへば、誰も知る松尾桃たけ青芭蕉翁であります。此の芭蕉翁が或年の春三月、山城、攝津の間を遊歴して居りましたが、長い間儉約をして金一兩を餘しました。これは翁が永年心掛けて居た吉野の花見の旅費に充てる爲でした。翁は勇んで大和まで参りました。とある路傍の茶店に休息して、圖らず右の孝子お今、長兵衛の話聞きました。翁は涙を流して感じ入り、其の村や道筋を尋ねまして、直様それから孝子の

人倫の道

律義一遍
たつて

飄然

家に参りました。姉弟に會ひまして其の孝行を賞し、なほ人倫の道を諭し、父を慰めて一兩の金を出して、いさゝかながら父を養ふ料にといつて贈りました。律義一遍の姉弟は、固く辭退致しましたけれども、たつて置いて立去りました。勿論翁は最早吉野へは行かず、其のまゝ、飄然として歸つたのであります。

翁は途中で或知人に出逢ひました。知人は直ちに聲をかけて、「先生、吉野は如何でございましたか。」と尋ねました。翁は吉野へは往かずに歸る所である事を、かい摘まんで話しました。知人は、「先生、吉野の花見は

人の心の花
呵々

あわたし

永年のお望でございましたのに、御残念でせう。」と申しました。翁は頭を横にふつて、「イヤイヤ、決して残念でない。今回は人の心の花を見て、吉野の花見にも優る樂みを致しました。」と、呵々と打笑つて、後をも見ずに去りました。

——斯民家庭——

二二 夕 立

坪内逍遙

風鈴の音もせず、庭の木の葉も動かさず、大空の雲のみ、あわたしげに走る。やがて風俄に吹きおろす。木の蟬は鳴きやみ、蜘蛛はちゝこまりて、巢の眞中に

二二 夕 立

一〇五

銀の矢のやうなる雨

ぶらさがる。

雷の音おし出すやうに、南より西へと鳴りわたる。いなびかり激しく閃き、雷の音ちかくなる。銀の矢のやうなる雨横ざまに飛來りて、雨戸をたつる間もなく、縁をうち、屋根をうつ。雨の音、雷の音、風の聲、暫くは其の外の聲は聞えず。

かしまし

古き屋根のそこゝより雨もり始む。盥よ桶よと呼ぶ聲、笑ふ聲かしましく、臺所の板の間に足音あわたし。

雨やゝ小ぶりとなる。縁先の手拭かけ、尙はたく

と窓をうちしめたる障子の紙、風の出入毎にはたりはたりと鳴る。

雨全く霽る。窓を開くれば風爽かに心地よく、木々の青葉、瓦屋根、目に入る物皆いさぎよし。蜘蛛は巢を繕ひ、蟬の聲また聞えて、庭は拭ひたるやうなり。

—女子國文教科書—

自修文

二二三 蟻

阪本^(一) 四方太

俄雨は今しがた霽れて、處々に綿のやうなちぎれ雲が浮いて居る。庭におりて、何を見るときもなしに立つて居る中、ふと蟻の穴が目についた。

(一)鳥取縣の人。文學士。大正六年終。今しがた。今すこし前。綿のやうな云々。綿をちぎったやうな雲。

雨後の修繕
 雨でいたんだ
 自分達の穴を
 つくろひ直す
 こと。
 工夫
 はたらいて居
 る蟻のこと。
 土くれ
 土のかたま
 り。
 適宜の處
 ほどよい處。
 蟻塚
 ありのたふ。
 取りも直さ
 ず
 すなはち。
 油汗を流す
 非常に骨を折
 るのをいふ。
 ぬき足さし
 足
 音のせぬやう
 にこつそり歩
 くさま。
 息をこらす
 いきの音も立
 てないで静か
 にすること。
 要害
 蟻に取つて用
 心のよい場
 所。

暫くしやがんで見て居ると、今は雨後の修繕と見えて、どの穴でも工夫が頻に土くれを外に運び出して居る。工夫は身の長三分ばかりの大蟻で、土くれをくはへて出ては適宜の處に投げて歸る。すると、他の大蟻が其の跡からくはへて出る。二つの穴に十匹ぐらゐ働いて居るので、此の時はや幾らか蟻塚の形が出来た。蟻塚といふのは、彼等の頭より遙かに大きく、さうして、重い土くれの集りて、取りも直さず工夫の油汗を流して持出したものである。

何かくれてやるものは無いかと思つて、そこらを見廻すと、後の菊の葉に大きな蠅が止つて居る。ぬき足さし足近寄つて、手を差伸べて捕らうとすると、蠅はふういと飛去つた。しくじつたと思ひながら、息をこらして窺ふと、今度は前よりも一層要害な葉の上に止つて、こゝまでお出で、といつたやうに身構へた。さうし

警戒に云々
 用心に用心し
 て、非常に用
 心して。
 満身の力
 からだ中の
 力。
 手答慥かに
 云々
 手ごたへがあ
 つて、たしか
 につらまくあた
 った。
 のけぞり返
 る
 あをむけにな
 つて。
 した、いか
 ひどく。
 痛手
 おもいきず。

て、両手を揉んで頻に頭を撫でて見せる。おのれにくい奴め。と思つたが、前の失敗に懲りて、今度は警戒に警戒を加へて、じりじりと詰寄つた。こちらの武器はたゞ爪一つなので、満身の力を爪先にこめて、びちんと弾くと、手答慥かに命中した。蠅は三尺先の大地にのけぞり返つてもがいて居る。早速蟻に投げてやると、さあ大騒だ。蟻が出て来て引張り込まうとする。蠅は片足踏張つて、引かれまいとする。いよゝゝ蠅と蟻との相撲が始つた。したゝか争つて居るうち、蠅は痛手に疲れてくる。蟻は加勢が出てくるといふので、蠅はとうとう穴に引張り込まれた。まづこれで安心と思つて居ると、再び蠅の頭がにゆうつと出て來たのには驚いた。其の内にも盡きたと見えて、再び引張り込まれた。今度は、幾ら待つて居ても出て來ない。蠅は實に死力を出して争つたのである。蠅とはいへ、あつばれな最期であつた。

くま すみ。すみつ

せん方なく しかたなく

精進

なまぐさくな いもの。 まだしもだ

開鑿 まだよいが。 穴をほりひら

熱中 くこと。 一心になるこ

連絡

つとまあつて 居ること。

自分は餘りの面白さにもつと蠅は居ないかと、あちこち探した。菊島に蠅殺があつた。といふ噂でも立つたのか、今度は蠅の影さへも見えない。そこで蜘蛛はどうだ、蜂の巢はないかと、残るくまなく尋ねまはつたけれども、生憎何も居ない。座敷に上つて、蠅を狩始めたが、やつぱり捕れない。せん方なく、臺所にいつて、飯粒と麩の切とを取出して、これを蟻の穴の口に分配した。すると、一時は蟻も驚いたやうに、二三匹づつ寄つて来て、上つたり下りたりして居たが、しまひには鼻突合せて相談を始めた。精進はいやだね。今少しひまな時ならまだしもだが、人間の氣が利かないにも困つてしまふ。といふやうな風で、もう見向もしない。例の開鑿に熱中して居る。自分も大分飽きて來たので、いたづらを始めて、卷煙草の灰を穴に落した。すると、蟻は其の穴からは出入をやめて、他の穴から出て來る。そこでいよゝゝ内部の連絡して居る事

天から云々 どころからとも なく不意に出 て來るのをい

矢庭に いきなり。 突貫 一氣につきす すむこと。

潮の涌くが 如く あげ潮のわい て來るやう

がわかつた。次に穴を皆砂で埋めてしまつた。すると、蟻どの我慢がしきれなくなつたと見えて、ぼつ／＼土を持ち上げはじめた。此の時、天から降つたか、地から涌いたか、數千の蟻が知らぬ間に庭の彼方に眞黒に集つた。其の擴りは凡そ直徑二尺ばかりの圓形をなして居る。やがて此の蟻の群が運動をはじめて、自分が先程まで見て居た蟻埕に近づいた。近づいたと思ふと、數十の蟻が矢庭に蟻埕に突入した。他の蟻も我も／＼とそこに向つて走つた。まるで軍隊の突貫と同じだ。殆どみんなはいつてしまつて、残が僅かに十四五匹になつた頃に、先登の蟻が白い繭のやうな形をした卵を咬へて駈出して來た。續いて二匹三匹と駈出して、それから跡は、出るとも／＼、潮の涌くが如くに出て來た。てんでに白い卵を持つて居るからをかしい。運動會の提灯競走はこんなに人數が多くない。祝賀會の球燈行列はこんなに活潑でない。

奇觀
めつたに無い
もの。

遠征軍
とほい處をせ
軍。いはつする
掠奪
うばひとるこ

崇敬

實に庭内の一大奇觀である。
先登ははや庭を横ぎつて、隣の庭の草むらを踏越え、くゞり抜
けて行く。皆々續いて行く。どこまで行くかと、首を伸して見て居
ると、隣の庭も横ぎつて、遙かあなたの胡瓜畠の方へ行つてしま
つた。これは多分遠征軍の掠奪とでもいふのだらう。折から座敷
の時計が四時を打つた。此の掠奪は僅か四五分間に終つたので
ある。蟻垤はひどく荒されて、工夫等は何處へ行つたか、終に一匹
も見えなくなつてしまつた。

—ほとゝぎす—

二四 祖先

祖先を崇敬するは我が國古來の美風なり。我が國
は世界の文明國中にて、最も古き國の一にして、上に

家名

萬世一系の天皇あり。下に忠良なる臣民あり。かくて
皇室を尊び、祖先を敬ふの美風を生ぜり。此の美風は
われ等が祖先より受けたる所なれば、われ等はまた
これを子孫に傳へざるべからず。われ等の祖先は、君
には忠を盡し、父母には孝を致し、兄弟に友に、夫婦相
和し、朋友に信なりき。われ等がこれ等の諸徳を重ん
ずるは、即ち祖先を崇敬する所以なり。
祖先に對する務の中にて大切なるは、家名を汚さ
ざることなり。われ等が正しき行をなし、君の爲、國の
爲、力を盡し、行を慎み、業を勵みて、家名を全うするは、

門地

祖先に孝なる所以なり。もしこれに反し、人たる道に背きて、家名を傷つくることあらば、これ即ち祖先の名を汚すものにて、祖先に對して不孝となるなり。家名の重んずべきは、門地の如何によるべきにあらず、又祖先の功業の有無に拘るべきにもあらず。

祖先より傳はりたる家産を保持し、進んでは之を増殖するも、祖先に對する務なり。天災、地變、疾病の如き避くべからざる事情によるに非ずして、祖先より傳はりたる家産を破るが如きは、祖先に對して大なる不孝なり。又新に一家を興すものも、家産を作りて

其の家の基礎を固うし、以て祖先の名を全うすべし。家産は大切なるものなれば、家業に勉勵して、家産を増殖することに努むべし。されど不正なる手段によりて家産を作るが如きは、却つて祖先の名を傷つくるものなれば、堅く戒むべし。——國定高等小學修身書——

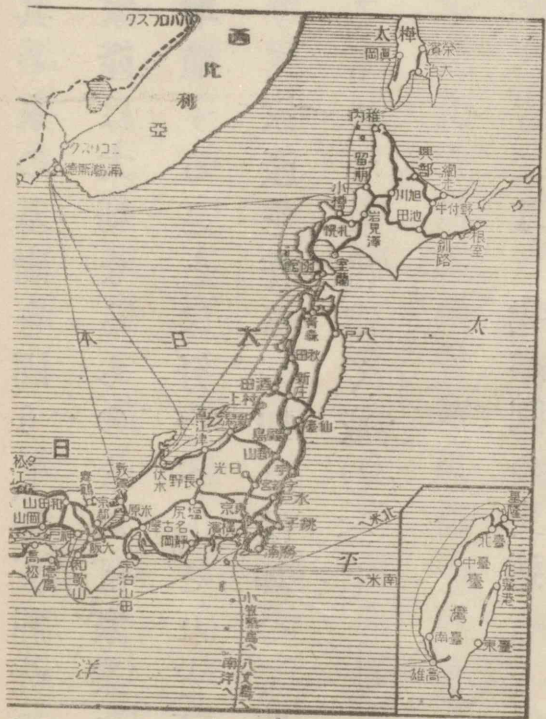
二五 我が國の交通

德川藩政の頃には、大小二百六十餘藩全國各地に在りて、各其の境を嚴にし、天然の難所の外なほ人爲の關所をさへ設けたり。されば行旅の人、百里の道程

藩政

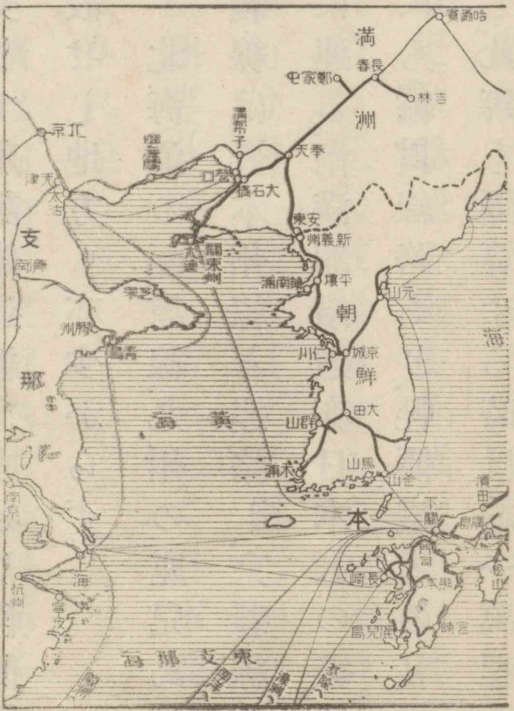
道程

架橋



を行かんには、十日の旅寐を重ねざるべからず、交通の具とても、駕籠又は駄馬の背あるのみなりき。然るに今や阪路を平夷にし、河川に架橋する等、道路の築造次第に成りて、全く昔日の觀を改め、凡そ國內の道路は、其の必要の程度に應じて、國道、府縣道、町村道の三とし、常に

邊陲



修築改造を怠らず、邊陲の地に至るまで、車輛を通じ得るに至れるを以て、交通の利便いふばかりなし。

就中、著しきは鐵道の敷設にして、明治五年始めて東京横濱間の開通を見しより、年々其の哩數を増加し、今や内地のみにて八千四百哩以上に達せり。本州

軌條

鐵道網

には東京より青森に至る東北線、京都、大阪を経て神戸に至る東海道線、神戸より下關に至る山陽線の三大幹線あり、東京、大阪附近には各地へ通ずる軌條相交りて、所謂鐵道網を成せり。輕便鐵道、電氣鐵道を敷設せし地方も亦少からず。

經營
縱貫
通算

北海道の函館線、九州の鹿兒島線、朝鮮の京釜線、京義線は、皆本州線と連絡し、京義線は更に南滿洲鐵道に連る。南滿洲鐵道亦日本人の經營する所とす。臺灣にも縱貫線路あり、輕便鐵道の私設に係るもの亦多し。此等を通算する時は、約一萬哩に達せり。

億劫

陸運の便かくのごとくなるに比して、水運の事業は更に急速の進歩を成せり。日本郵船、大阪商船、東洋汽船の三大汽船會社あり、内地沿岸、支那、印度等への航行は言ふに及ばず、歐羅巴、阿弗利加、南北亞米利加、濠洲等、世界行く所として日本商船旗の翻らざる所なきに至れり。

昔は内地の旅行にも長日月を要して、途中の危難も尠からざりしかば、旅行は極めて億劫なるものなりしが、今は海外へ行くもいとたやすく、旅行を以て人生樂事の一と數ふるに至れり。

二六 天長節

佳節
めり

踐祚

長き暑中休暇は終りて、新學期は今日より始る。休暇の最終日たる八月三十一日は即ちめでたき天長節なり。十月三十一日を以て天長節祝賀日と定められたれば、八月には宮中の御宴もなく、學校にて奉祝の儀式もなけれど、國民は此のめでたき佳節を忘れず、包みあへぬ喜は人々の心に充つめり。かけまくも畏けれども、天皇陛下には明治十二年の御降誕にましく、明治二十二年の天長節を以て皇太子に立たせられ、明治四十五年七月踐祚あらせ

天資

登極
(一)大正元年七月三十一日午前十時朝見式の勅語

和衷協同
獎順

られたり。先皇の天資を受けさせ給ひて、御幼時より明敏におはし、皇太子殿下として、年々各地方を巡啓ありて、民情を見そなはし給へり。登極の初、群臣を召して下し給へる勅語の中に、
朕今萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ統治ノ大權ヲ繼承ス
祖宗ノ宏謨ニ遵ヒ憲法ノ條章ニ由リ之レカ行使
ヲ愆ルコト無ク以テ先帝ノ遺業ヲ失墜セサラン
コトヲ期ス有司須ラク先帝ニ盡シタル所ヲ以テ
朕ニ事ヘ臣民亦和衷協同シテ忠誠ヲ致スヘシ爾
等克ク朕カ意ヲ體シ朕カ事ヲ獎順セヨ

聖世

身に體す

関

と仰せられたる、畏しとも畏し。

我等は明治の聖世に生れ、大正の今の御代に人と成らんとす。先帝の下し給へる教育勅語と戊申詔書とを身に體して、常に勤勉して、學を修め、業を習ひ、此の大詔に宣はせたる如く、忠誠以て今上陛下に仕へ奉らざるべからず。此の心、何時として忘るゝ時なけれども、昨日の天長節に逢ひて、今更に其の感の深きを覺ゆ。

二月の後、天長節祝賀日は来るべし。其の頃は秋も已に関にして、學期の半ばなれば、心神益、爽かにして、

よく

學業の進歩も一入ならん。明治の御世の天長節をさへしのびて、感慨いよく、深かるべくこそ。

自修文

二七 しか女

小川直子

大和國磯城郡爲川村の住民永井佐平といふ者の娘、しか女と呼べるは、幼きとき疱疹を病みて盲目となりぬ。此の女のかく不具の人となりて、人並なる女子の本分をも盡し得ざるを、父母はいと不便のことに思ひ、とやせましかくやせましと、心を悩ましかけるが、しか女はまして憂き事と朝夕憂へ、自ら工夫して、手さぐりに裁縫を習ひ、覺えけり。初の程は小さき風呂敷、あるは小袋などのたやすき物のみ縫ひ居たりけれど、やうく手なる、儘に衣服をも仕立つるまでに上達し、苦辛數年を積みければ、後には

(一) 女流教育家。金澤の人。文學を以て高輪御殿に奉仕す。大正九年没。

盲目

不具

不便

氣のどく

とやせまし

かくやせまし

あゝしたらよ
からうか、か
らうたらよ
らうか。

なまじひなる云々
いかげんの女
の意。
明を失ふ
めくらにな
る。
具足
かけた所なく
そつてゐる
こと。
おのがじし
めいくに。

なまじひなる尋常婦人の手工よりも優りて、うるはしく仕立つるやうに成りけりとぞ。明を失へる少女すら、熱心に勉むる時は、かくの如く成就するものなれば、身體具足せる人は、天よりわれに幸福を與へたまへる恩恵を時の間も忘るゝことなく、おのがじし其の業に出精すべきなり。

——高輪御殿進話録——

二八 鳥の美

飯島 魁

風致
山容水態

風致といふものは、單に山の形、水の姿、それに美しい色彩の美を與へて居る植物ばかりで組成せられて居るのでは無い。山容水態如何に麗しく、緑樹彩花いかに美しくとも、其の間に動く何物かが無ければ、

藝術
題材

貧弱

(一)古今集の歌、
讀人知らず

單調

あしらふ

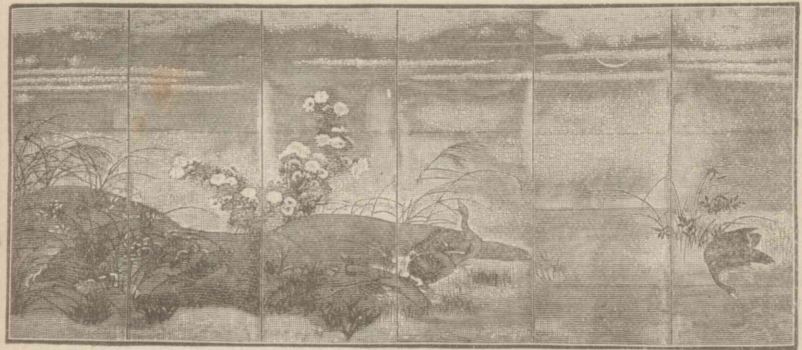
風景は生きた趣を生ぜぬ。昔から花鳥といふ。文學、繪畫、彫刻、音樂等あらゆる藝術には、花と鳥とが重要な題材とせられて居る。殊に吾が國の繪畫や、詩歌には、花と鳥とが主要な地位を占め、其の中から花鳥を除き去つたなら、非常に貧弱なものと成つてしまふ。

わが宿の池の藤波咲きにけり

山ほとゝぎすいつか來鳴かん

といふ通り、花だけ、鳥だけでは單調である。花に鳥をあしらひ、鳥に花を結びつけて、始めて複雑な美が成立する。梅に鶯、「卯の花に杜鵑」、「蘆の花に雁」といふ風に、

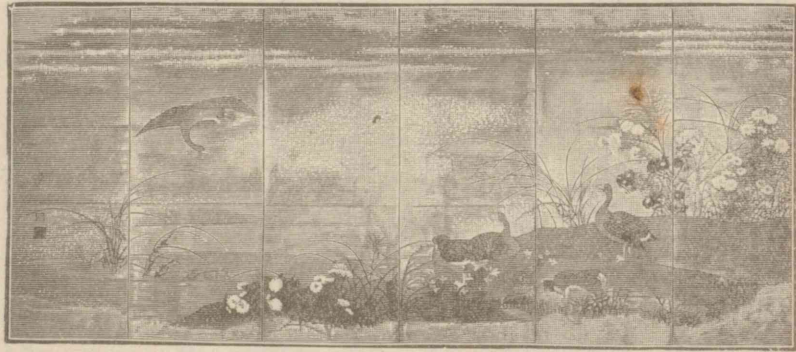
(一)奈良春日山の
麓。
(二)武藏國の大平
原。



蘆 雁 の 圖

四季それぐの花には鳥が附屬物となつて居る。

獨り鳥のみならず、あらゆる動物は皆かく風致に美を加へて居る。禽獸蟲魚は昔からの畫題であり、詩材である。春日野から鹿を奪ひ、武藏野から蟲を除いたならば、其の春の旦、秋の夕の景色は、どれだけ無味なものと成るであらう。それ程に美觀上の價值あるもの



(土佐光信筆)

を、人間が勝手氣儘に捕殺する權利をもつて居るであらうか。分り易くいへば、狩獵税を出しさへすれば、それで勝手に鳥獸を殺してもよいであらうか。吾々が擅に鳥獸の命を絶つ其の結果は、一年や、二年では現れて來まいが、五年の後、十年の後は何如。更に二十年、三十年の後には、吾々の見た美しい鳥も、珍しい獸も皆姿を隠して、吾

〔鶯の笠にぬ
ふてふ梅の
花、折りてか
ざさん老かく
るやと。〕
今集、東三條
左大臣

ゆゝしい

誇大の言

吾の子孫はそれを見ることが出来なくなりはずま
いか。鶯の笠に縫ふてふ梅の花。とある鶯は、どんな鳥
であらうといふやうな事に成るかも知れぬ。かうな
ればゆゝしい一大問題である。吾々は吾々の見た鳥
や獸を、やはり子孫に遺して、子孫にも楽しませてや
りたく思ふ。

これは誇大の言ではない、日本の鳥類は今將に全
滅せんとしつゝある。去年と今年とを比べて、其の間
の差異を發見することは困難である。併し今日と十
年前、二十年前と比べて見ても、其の間に非常な差異

過去を以て
將來を推す

現象

觀察

歴史的にな
る

のあることを何人も感知するであらう。過去の變化
を以て將來を推せば、十年後、二十年後にどういふ現
象を呈するであらうか、今から豫め想像するに難く
無い。廣い世界の目から觀れば、滅亡した動物は無數
である。狭い日本だけで觀察しても、既に滅亡して歴
史的になつたものが、いくらかもあるのである。

諸子は美しい桃花鳥色の色彩を知つて居るであ
らう。併し今は桃花鳥色こそあれ、其の色に此の名を
負はせた朱鷺といふ鳥は居ない。桃花鳥色とは、其の
色が朱鷺の羽色に似て居るから附けられた名であ

思案投首

(一)京橋區。
(二)天恩山羅漢寺。もと本所
ありしが、今
は他へ移れ

るが、此の鳥は最早全滅して、其の姿を見ることが出
來ない。蘆田鶴の千代呼ばふといはれた江戸の千代
田城は勿論、江戸附近には多く鶴が居たものである
のに、維新後は其の影をだに見ることが出來なくな
つた。鶴（トビ）も昔は澤山居た。淺草の觀音へ行く子供は、皆
鶴が見られるといつて喜んだものである。築地（一）、淺草
の両本願寺、本所（二）の五百羅漢の屋根の上には、うよう
よする程澤山鶴が居たが、今は早全國一般に居なく
なつた。鷺の滅つたことも夥しいもので、昔は到る處
の水田に水鏡を映して、思案投首の白鷺を見ることが

が出来たが、今日では御獵場以外之を見ることが出
來ない。これはほんの二三の例である。其の他あらゆ
る鳥類は、日本から姿を隠さうとして居るのである。
まことに風致の上から觀て、ゆゑしい一大問題では
ないか。

二九 柔よく剛に克つ

(一) 仁惠社に給事する一婦人ありけり。劇しき戰に、一
人の兵士の、重傷を被りて危篤の容態なるを看護し
けり。然るに兵士は病床にありても、猶殺伐の氣をさ

殺伐の氣

危篤の容態

(一)今の赤十字社
の病院の如きも

罵詈す

厭忌す

悶え苦しむ

まらず。時々過激の辭を發して、其の婦人を罵詈し、却つて懇切なる看護を拒みけり。されど婦人は聊かも厭忌する事なく、益心を盡して懇に看護しけり。

一日兵士は負傷の痛殊に甚だしく、悶え苦しみければ、婦人は醫に請ひて水薬を調へ、兵士の前に至りてこれを進むるに、兵士はこれを服して苦痛を久しうせんよりは、寧ろ死して苦痛を免るゝの勝れるに如かじ。とて、堅く拒みて肯ぜざりき。婦人はひときは辭を和げて、其の然らざる故を説諭しけるに、兵士は其の薬を取りて、これを婦人の面に灌ぎかけけり。さ

ひときは

勃然
怒氣面に溢る

れど婦人は少しも不平の色なく、更にかの薬を調へ、再び兵士の枕頭に至り、これを進むること初の如くなりければ、兵士は勃然として怒氣面に溢れ、忽ち薬碗をとりて、これを打碎きしかば、薬水散じて婦人の衣を汚せり。

兵士は心中窃に、かくてこそ、かれが頑固を懲すに足るべけれ。と思ひしに、婦人は猶前の如く薬を調へ、懇に勧めて曰く、「疾く此の薬を服し給へ。いざ、召し給へ。必ずな否び給ひそ。」といふに、兵士は始めて其の誠意に感じ、怒氣忽ちに消えて、涙を流して言ひけるは、

な給ひそ

神の使

「あはれ君は必ず神の使なるべし。さるを愚にも怒り辱めしは我が過なり。」とかつ泣き、かつ謝して、遂に水薬をとりて快く服したりとぞ。「柔よく剛に克つ。」とは、かゝる婦人をやいふべからん。

— 婦女鑑 —

三〇 看病

新保 磐次

世に病人ほどあはれなるものはなし。春の花、秋の紅葉も心の儘に見ること能はず。山海の美味も心の儘に食ふこと能はず。読み、書き、縫物も心の儘に勉むること能はず。唯つれごとと籠り居て、終日心を傷ましむるのみ。

しむるのみ。

此のあはれなる人を勞り慰むるは、人たるものもの務なり。殊に女は心優しく、注意細かなるものなれば、看病の業は最も適當なる務なり。

病人の室は折々明放して空氣を通し、悪しき空氣の滯らぬやりにすべし。然れども風の向を考へて、直ちに病人に當らぬやりにすべし。

衣服も屢取替へて風を通し、日に當て、汚れたるをば直ちに洗ふべし。こは常の人にも必要の事なれど、病人には殊に意を用ひて、萬事清潔をむねとすべし。

しむねとすべし

事づくなに

病室には雑具をよく取片付け、時々の花、青葉、又は面白き繪などを程好く飾り、事づくなに、綺麗にすべし。起居、ふるまひ、障子の開閉を、荒々しく忙しくすべからず。何事も病人の心静かならんやう心付くべし。病室にありては、憂顔をなし、或は小聲にてさゝやき合ひなど決してすべからず。かくすれば、病人は己の病の重き故かとして、心を傷ましむるものなり。また病人に妄に話し掛けて返答せしむべからず。たゞ面白き話を聞かせ、又は靜かに仕事をしつゝ、傍に待るべし。

一に看病二に薬

かく親切に、細かに、靜かに、面白く介抱する時は、病人の心安く、平かにして、全快も意外に速なるべし。世の諺にも、「二に看病、二に薬」とて、看病の力は、遙かに薬の力に勝るものとせり。

(樽陶)

三一 病める友の許へ

秋のさびしく降りて、よそで健なる身にも、樽陶
しと堪へられたまふ、此の頃、病状は、如何にも、看護
婦の廊下を、歩通ふ足音のみ、聞ゆる病院内の
夜のうらみ、さすくとも、心な、やとひ、さすて、春

(御眺)
(本望)

新子様方より根かきと云ふは庭の花可なり
忍中にに嘆出でせめては病床の許様に見
に入られたる御一枝使に持たせ差まつは
の御眺もなり給けし花も如望とあり
次の日曜には新子様清子様とておま
はまありせて何かありらまは給も中上
夜と樂しみ居ひかゝ

右返事

御手紙ありがたくお見致す所の通り返事

も書けはほどに相成ひ百の安心とて一夜の夜々
の尋ねもいふ親切もにみてもありがたく友
なればこそあなただけはいとと誠にく
存ひあなた様よりの贈物とて看護婦の持
まりの箱の一枝枕元の花瓶に生けしは五尺に
もあまう長き枝は床のともども居て寝
き病室も俄しく相成ひ心地ぬ朝夕のま
ながめと誠にありがたくあまうと一筆の使を
待たせおまうてお禮まてに書まうけひ

三二 春夏秋冬

一

空も霞みて、	遠山の
櫻花さく	永き日に、
囀る鳥の	聲聞けば、
春の喜	はてもなし。
柳の緑	菜の花の
あや織る野邊に	旅寐して、
曇りもはてず	照りもせぬ
月を見るこそ	嬉しけれ。

(一) 照りもせず
くもりもはてぬ
春の夜の、おぼろ月夜に
しくものぞなき。
断古今集、大江千里

二

ほととぎす鳴く	森蔭に、
卯の花白く	咲出づる
夏の朝の	眺こそ、
春にもまして	風情あれ。
晝の暑さを	行水に
流して庭の	ゆふ涼、
いさゝ小川の	水の面を
螢飛ぶこそ	嬉しけれ。

風情

いさゝ小川

三

〔一〕秋來ぬと目
にはさやかに
見えねども、
風の音にぞ驚
かれぬる。
〔古今集 藤原
敏行〕
さやかに

〔二〕白露をこぼ
さぬ萩のうね
りかな。
〔芭蕉〕

いつか夏去り、
目にはさやかに
風の音にも
こもりて、秋は
萩のうねりに
命とたのみ
聲もふけ行く
書を讀むこそ
四
林まばらに

秋來ぬと
見えねども、
静けさの
物寂し。
散る露を、
鳴く蟲の
夜半の窓、
嬉しけれ。
葉は落ちて、

あす

そだ

寒げに見ゆる
裏の大川
橋の脚いと
雪降積る
るろりにそだを
親はらからの
語り合ふこそ

鳥の宿、
水あせて、
高きかな。
家の外、
折りくべて、
永き夜を
嬉しけれ。

百修文

三三 一年の折々

〔一〕元日や晴れて雀の物語「老いたるも、若きも、麗にさし上る初日

〔一〕風雪の句。雀
のうれしげに
鳴るをいふ。

風俗
 昔おもほゆ
 此の日野邊へ
 用て若菜つん
 だのである
 松の内
 元日から七日
 まで松かざり
 のある間

(一) 嵐雪の句。陽
 氣が暖になる
 につれ、梅の
 花が一輪つづ
 づいて行くの
 をいふ。
 (二) 蕪村の句。く
 まぐまはすみ
 ずみのこと。
 はた無くは
 あらず
 無いことも無
 い。
 (三) 明治三十八年
 三月十日

影を仰ぎ見て、天御代の新年を賀ぎ合ふ。三箇日の朝なく、雑煮の餅を祝ふも、古き風俗とて嬉しく、七日の粥にも若菜つみけん昔おもほゆ。松の内もいつしか過ぎて、八日よりは学校の授業も始る。今は年の中の最も寒き時にて、五日の頃より二月二三日の頃までを寒といふ。

寒明けて立春となる。立春とは東風水を解く時なりといへど、東北地方の餘寒の厳しさは寒の中にも劣らず。立春の前夜は節分にて、家々に、福は内、鬼は外、と豆撒の聲の聞ゆる處今もあるべし。十一日の紀元節も過ぎて、梅の花も咲きそむれば、梅一輪一輪ほどの暖さの句も想ひ出さるれど、くまぐまに残る寒さや梅の花の感はた無くはあらず。

雛遊は三月三日にする習にて、桃の咲く頃なれば、桃の節供ともいひしが、今の曆にては花の蕾尙いと固し。三月十日は奉天占

偉勳
 しのはしむ
 おもひださせ

ひたす
 水につける。

(一) 蕪村の句。色
 紙とは歌など
 を書く四角の
 紙で、おもに
 美しい彩色か
 ら歌よむと
 いはれるの
 で、苗代を色
 紙に見立てた
 のである。
 (二) 明治三十八年
 五月二十七日

領の陸軍記念日にて、永く勇武なる軍隊の偉勳をしのばしむ。春分は二十三日の頃にて、晝夜の長さ相同じ。俗に彼岸の中日といふ。即ち春季皇靈祭の日なり。中日の前後各三日を併せて七日の間を彼岸といふ。これは秋も同じく、秋の彼岸の中日は秋季皇靈祭の日に當る。春の彼岸は稲種をひたす時、秋の彼岸は麥を蒔始むる節なり。諺に「暑さ寒さも彼岸まで」といへり。

早くも咲出づる彼岸櫻をさきがけにて、四月は野も山も花の雲なり。五月の一日又は二日を八十八夜といふは、立春より數へて八十八日目の意なり。苗代の苗漸く伸びて、青き疊を敷けるが如し。古人の句に、

苗代(一)の色紙しに遊ぶ蛙かかな

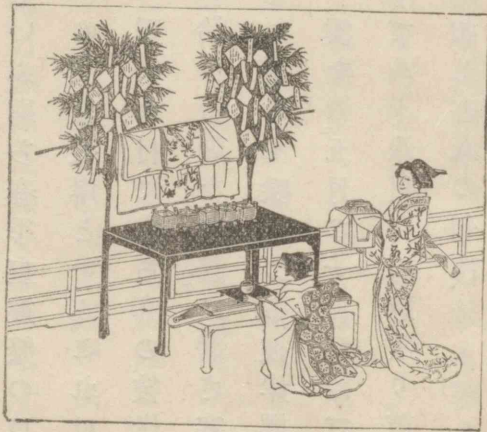
五日は男の子の節供とて、鯉この空高くひるも勇ましく、二十七日は日本海海戦の海軍記念日なれば、學校にて海戦の講話を聞

くも思出多かるべし。

六月十日の頃より梅雨の節に入り、連日の鬱陶しさ堪へ難けれど、農家には大切なる雨なり。六月二十五日は皇后陛下の御誕

至情
まごころ。

精霊祭
死者の苦みを
除くためのま
つり。



星祭 (江戸時代)

辰にて、此の日を天長節に對へて地
久節と申し奉るも、臣民の至情にこ
そ。七月七日の夕は星祭の笹竹にぎ
はしく、盆の三日の夜の精霊祭には
燈籠の火影物哀れなり。

の寒中より厳しきが如し。八月三十一日は天長節なり。立春より
數へて二百十日、二百二十日頃は暴風雨多ければ、農家はしづ心
なし。いつしか新穀も實のりて、神宮の神嘗祭は十月の十七日ぞ
かし。十一月二十三日の新嘗祭も過ぎて後は、霜置き霰たばしり
て、日も次第に短し。十二月の末残る日數ふるばかりになれば、處
處に年の市など立ちて、人々は復新年を迎ふるに忙し。
親の用にたつ子幾人年の暮。——國定高等小學讀本——

しづ心なし
を心しておち
ないて居られ

(一)伊勢神宮。

年の市
正月の入用品
を賣る市
親の用に云
云
太紙の句。

三四 愛國婦人會

明治維新の後、全國皆兵の令を布かせ給ひ、丁年に
達せる男子をして、悉く所定の兵役に服せしむる事
に掟て給へるは、我が國上古の舊制を復し給へるに
外ならず。國武茲に於てか揚り、明治二十七八年及び

掟て
國武揚る

世界の耳目
を驚かす

豈……べけ
んや

組織

癆兵

恤兵

弔慰

慰藉

適應

三十七八年兩度の大戦役に於ては、空前の大捷を得て、世界の耳目を驚かすに至れり。帝國の女子豈徒にして止むべけんや。愛國婦人會の組織は明治三十四年を以て成れり。此の會の事業は、戦死者並びに准戦死者の遺族、及び癆兵の救護を目的とするものにして、戦時に於ては軍隊の慰問、送迎及び恤兵品の寄贈、軍人家族及び傷病兵の慰問、戦病死者の弔慰、並びに遺族の慰問、軍人家族及び遺族への授産、幼兒の保育、遺族及び癆兵の慰藉等、軍國の婦人として適應なる事業に盡力し、遠征の將卒をし

内顧の憂

發動

精か

て内顧の憂なからしめんことを期す。要するに、劍銃を把りて戦場に出でざる代り、内に居て國民皆兵の



閉院宮妃殿下

義務を分たんとする愛國心の發動は、即ち此の會を成立せしめたる所以にして、能く我が國婦人の日本魂を發揮せる

ものといふべし。

此の會を主唱創設せしは、肥前唐津の人奥村五百子なり。五百子は明治三十三年清國事變に際し、本願

所見
朝野

(一)岩倉具定夫人

久

趣書

(二)麹町區内山下

同

(三)こもと
殿下
王妃智
基子

寺慰問使の一行に加りて支那に赴き、具に將卒勞苦の情態を視察し、其の慰藉及び戰死者遺族救護の切要なるを感じ、歸朝の後親しく東伏見宮、閑院宮及び同妃殿下に拜謁して所見を陳じ、尙朝野の人々に説きて其の賛同を得、三十四年三月岩倉公爵夫人を會長として趣意書を發表し、同七月各地方長官を華族會館に招きて、各府縣に支部を設くるの議を定め、尋いで雑誌を發行し、基金の制を定めたり。三十六年三月閑院宮妃殿下總裁とならせ給ひ、會務益揚れり。今や會員の數百四萬を越え、資産百九十三萬圓に及ぶ。

主唱創設の功は五百子に在りといへども、我が國婦人の愛國の至誠に頼るに非ずんば、如何でか此の盛況を見るを得んや。

明治三十七八年戰

役に際しては、此の會

の活動最も著しく、精

神的に將卒を鼓舞し、

物質的に遺族に惠與せし等、其の功甚だ大なりき。宜

なるかな、論功行賞の時、各支部にも金銀盃を賜ひて

之を表彰せられしことや。主唱者奥村五百子は明治

三十四年三月岩倉公爵夫人を會長として趣意書を發表し、同七月各地方長官を華族會館に招きて、各府縣に支部を設くるの議を定め、尋いで雑誌を發行し、基金の制を定めたり。三十六年三月閑院宮妃殿下總裁とならせ給ひ、會務益揚れり。今や會員の數百四萬を越え、資産百九十三萬圓に及ぶ。



奥村五百子銅像

宜なるかな
ことや

四十年病歿せしが、勳六等に叙して其の功をしるし給ひぬ。東京九段坂下愛國婦人會本部の構内には、五百子の銅像あり。

三五 明治天皇の御遺物を拜す 其の一

笠井信一

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、定時に参内致しましたところが、十一時過權殿参拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後一年間皇靈を祭らせられる宮中の御

(一)大正二年一月。

權殿

靈感

萬機の政

室でございます。即ち私共は此の度、先帝の皇靈を拜する特別の御恩典にあづかつたのでございます。そこで、私共は長い廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。蓋し其の瞬間は、何人と雖も一種の靈感に打れない者は無かつたのでございませう。其の權殿と申すは、平素皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て、之に充てさせられたのでございました。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機

親裁

徳教を布く

鷹懲の師

宏謨雄圖

瀟洒

and

の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には
 永くこゝに在らせられて、徳教を御布きになり、大憲
 を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或
 は鷹懲の師を起させられる等、宏謨雄圖一に此の中
 で御定め遊ばされたのでございます。然らばどんな
 に御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平
 常私どもが參内の節、休息を許される御部屋の方が
 却つて遙かに御立派である。しかも餘り廣くない二
 間續の御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあ
 るが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机

も、御椅子も、實に御質素なもので、絨毯じゆたんの如きは當初
 敷かれたまゝのものゆゑ、後には色も大分褪めて參
 りましたので、侍臣から御取替を屢、願ひ出ましたが、
 御許が無くて、遂に今日に至つたのださうでござい
 ます。

御部屋は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸
 があり、御机は御座所の中央に、南向に御据ゑになつ
 てあります。此の御構造を拜觀すると同時に、夏分は
 さぞ御暑いことていらせられたらうと感じました
 が、先帝には御暑さの御厭もなく、連日此處に出御あ

恐懼に堪へず

らせられたのでございます。之についても、
 年々に思ひやれども山水を
 くみて遊ばん夏なかりけり
 の御製を想ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。
 それのみならず、此の御部屋にはストーブの御設が
 ございますけれども、^(一)三十七年の冬以來、御用ひが無
 い。窃に承るに、其の年の冬の或朝、例の如くストーブ
 に火が焚いてございましたが、先帝が出御遊ばすや
 否や、「火を消せ。」と仰せられる。侍従は何故か分りませ
 んが、唯仰の儘に火を消しました。さて其の後と申す

^(一)明治三十七年。

大御心

斯民

ものは、如何なる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用
 を御許し遊ばされなかつたとの事でございます。こ
 れは勿論大御心の程を伺ひ奉るわけには参りませ
 んが、侍従方の推測し奉る所では、當時皇軍が滿洲の
 野に大敵と戦ひ、飢寒に苦しんで居るのに御同情を
 垂れさせられ、兵士と艱難を共にせんとの大御心に
 出でさせられた次第であらうと申すことでござい
 ます。それ以來は、たゞ一個の小さい丸火鉢のみを御
 使用遊ばされたとの御事。今其の御火鉢を拜觀する
 につけても、思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやら

賤が伏屋

せられたる御製、
桐火桶かきなでながら思ふかな
すきまおほかる賤が伏屋を
てございます。

三六 明治天皇の御遺物を拜す 其の二

此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許
されました。此の御部屋には、先帝の御學問所で御使
用になつた御遺物全部、其の儘に据置かれてござい
ます。是は今上天皇陛下の大御心に出でさせられた

仔細に

趣に拜承致しました。構造も、方向も、廣さも、御學問所
と全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十
三日、即ち先帝最後の出御當時の儘に、御備附になつ
てございました。床の間には其の當時の御軸物が掛
けてあり、其の前方には、御劔數振横たはり、御机は中
央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如
き者が御机に接近するなどは思ひも寄らぬ事でご
ざいますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀す
る光榮を得ました。
まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に

焼痕がございます。これは先帝が御煙草を召上つて
いらせられた節、臣下より政務を言上致しましたと
ころ、先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上
の或物に横たへて、御熱心に御聴取あらせられた折、
煙草が墜ちて此の焼痕がついたのだと申すことで
ございます。さて此の焼痕のあるテーブルの羅紗を
御取換へ申し上げんが爲、侍臣より幾度か願ひ出で
ましたけれども、斷じて御許が無かつたとの御事。蓋
し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ
遊ばされる御儉徳の至と拜察し奉ります。

修理

儉徳の至

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せに
なつた竹製の品でございます。其の中の筆は普通の
御品で、我等臣下の日常用ひる物と變らないのみな
らず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひ
ふるしに成り、墨も亦同様で、一寸位に磨りへらされ
た品もございました。鋏も同じく普通市場にある品
で、其の傍に、學校生徒等の用ひる普通のインキがご
ざいました。最初は、侍従の方が何かの調に用ひた儘、
其處に置忘れたのであらうと存じましたが、やはり
先帝の日常御用ひになつたものと承つて、今更な

慙愧に堪へず

がら御儉徳の高きに感激し、自ら顧て慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます。これは赤坂假皇居において遊ばされた頃から長く御使用になつた物で、毛も次第に磨切れ、皮も遂に破れるやうになりました。そこで御取換を願ひ出でました。が、なに、宜しい。とて、御許が無い。せめて御修理を願ひ出て、漸く御許を得た。併し適當の皮が無い事を言上致しましたところ、何の皮でも宜しいとの思召であつたので、赤犬の皮で補足したと申すこととて、侍

従が、「此の邊が犬の皮です。」と説明して居られました。

其の傍にホワイト・シャツを入れる白いボール箱やうの物が澤山積重ねてございましたから、何に遊ばす物か。」と侍従に尋ねましたところ、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとして、御手許に留置させられたのであるとの事でございます。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して奉るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。そして御

上奏
裁可

主務者

隨時
詠草

御歌所

用ひるに其
の途を以て
す

不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばされず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのでございます。實に天下の物は用ひるに其の途を以てすれば、一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞き召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に

冗費

一天萬乗の
君

關する費目の外は、務めて御節約相成り、聊かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。

一天萬乗の大君におはしましながら、禿びた御筆を御用ひになり、破れた敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか、皆これ節すべきを節して、有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

さて御次の間には、造花や、彫刻や、種々な物品が備へてございました。之を拜見致しまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御獎勵の爲御持歸り、又は御買上

趣を異にす

にならせられた物で、御裝飾の御目的とは考へられ
ません。それ故に、造花の如きも格別の物でなく、何年
前の物か色も褪めはてて、殆ど裝飾の用を爲さぬ物
まで、其の儘になつてございます。其の他、美術工藝品
の御買上も、皆御獎勵の爲で、俗人の道樂とは全く趣
を異にしていらせられます。御製に

千よるづの民と偕にも樂しむに

ます樂みはあらじとぞ思ふ

とございますが、實に此のやうな御樂みを求めさせ
られんが爲、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心

を遊ばされたのでございます。

御心づくし
隆々として
興る

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を
以て、隆々として興り、我等は世界の一等國民となり
ました。顧れば我等は長い間、聖天子御一人に、非常な
御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。こ
こに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

國民の力のかぎり盡すこそ

わが日の本のかためなりけれ

の御製をも同時に服膺して、公人としても、私人とし
ても、力のあらん限りを盡し、以て「我が日の本のかた

貢獻

め]の爲、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らん事を誓ふ次第でございます。——巖手學事彙報——

三七 明治神宮に詣てて

御紋章打つた大鳥居をくゞつて、砂利白い參道を進んで行く。道を挟む神木は全国各地からの獻上で、樹々の深い緑の色にも、國民が崇敬の心ばえは認められる。樓門を入つて、神前に額づけば、坐ろに明治の大御世が心の中に浮んで來る。

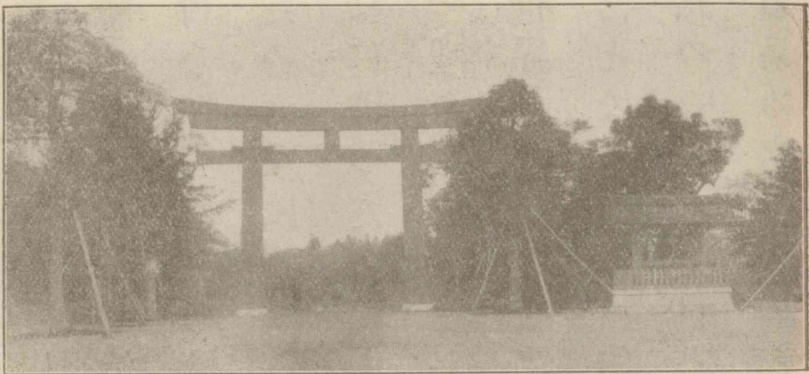
坐ろに

鳳輦しづくくと京都の御所をお立ちになり、東海

(一)明治元年九月二十日京都御發聲、十月十三日東京御着聲

稜威

齒牙に掛く



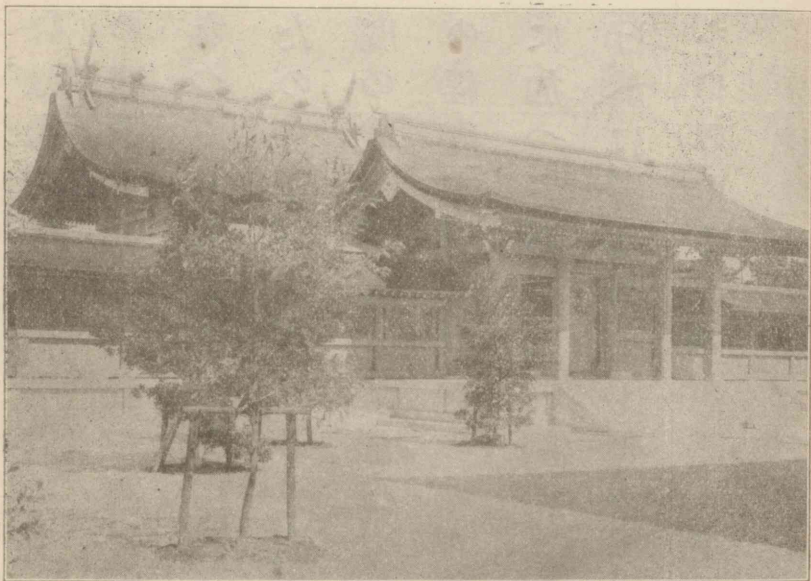
明治神宮表門

道を江戸へ御下りになつたのは明治元年の秋であつた。やがて江戸を東京と改稱して、こゝに大日本帝國の首都は定まつたのである。それからの四十餘年の大御世、御稜威の光は日一日と我が國の面目を改め、地位を高めて行つた。曩には列強から齒牙にも掛けられなかつた帝國が、後には世界の一等國と

振興せしむ

認められるやうになつたのは、實に此の天皇の御治績ではないか。明治五年には學制を發布して普通教育を振興せしめ給ひ、六年には徴兵の制を定め給うたので、家に不學の子なく、全國皆兵といふ今日の有様になつたのである。數隻の小汽船があつたばかり、一哩の鐵道も無かつた日本は、明治の御治世に於て、世界各國への航路を有する大汽船會社を有するこゝとなり、鐵道は内地だけでも八千哩以上になつた。此のやうな交通運輸機關の發達は、即ち産業の増進、貿易の膨脹を語るもので、通信機關の進歩も亦著し

陋習



明治神宮本殿

い。これは廣く知識を世界に求めるといふ趣旨から、西洋の學術を輸入し、舊來の陋習を破つて、百般の事業を改善し、他の長を採り、我が短を補ふといふ努力が、絶えず行はれた結果である。かくて明治廿二年

立憲

國教の大本

文化

霄壤の差

千古不磨
萬世不易

には帝國憲法の發布があり、翌廿三年には帝國議會の開會があつて、我が國は東洋唯一の立憲君主國となつた。教育勅語を以て國教の大本をお示しになつたのも此の年であつた。明治廿七八年、同卅七八年兩度の戰役で世界各國は確實に我が國民の教育、文化の程度を知り得たので、我が國に對する尊敬は次第に加つたのである。明治の初年と末年とを比較すれば、眞に霄壤の差も雷ならぬのである。外國人が之を世界史上の不思議と言つたのも無理はない。

帝國憲法は千古不磨の大典、教育勅語も萬世不易

照鑒

の經典、將來の國民は之を讀む毎に、明治天皇を追想し奉り、明治の大御世を回顧するであらう。さうして帝國の首都東京を想ふとともに、東京に明治神宮のあることを思ふであらう。將來國家に何事があつても、明治天皇の御靈が常に東京に照鑒あつて、帝國を護らせ給ふことを考へれば、そこに非常な強みを覺え、安心を感ずるであらう。橿原神宮に參り、平安神宮に詣でる時よりも、更に大きい、強い別様な感想を起すに相違ない。こんな事を考へながら、本の參道を青山通へ出た。

改訂女子國文卷一終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本
書には主として通用字を用ひたり。)

劍	剪	刃	函	滅	涼	準	況	決	冒	兔	免	佞	仞	兩	通用正		
劍	剪	刃	函	滅	涼	準	況	決	冒	兔	免	佞	仞	兩	通用正		
冤	墻	塚	塲	噴	器	唇	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	通用正		
冤	墻	塚	塲	噴	器	唇	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	通用正		
拔	拿	戲	懺	懺	慨	恆	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	通用正		
拔	拿	戲	懺	懺	慨	恆	往	廩	屏	并	帽	剋	寶	寇	通用正		
濱	溫	水	殲	欸	概	桿	晉	昂	既	整	携	攢	擯	插	通用正		
濱	溫	冰	殲	欸	概	杆	晉	昂	既	整	攜	攢	擯	插	通用正		
盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	猫	猪	猿	熔	陰	潛	澗	通用正		
杯	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	玄	貓	豬	猿	鎔	陰	潛	澗	通用正		
續	續	紀	穀	粘	籤	纂	節	竽	竊	秘	頤	穎	稟	研	通用正		
續	續	紀	穀	黏	籤	纂	節	竽	竊	秘	頤	穎	稟	研	通用正		
厠	勅	冲	徇	俟	京	亡	並	万		聳	耻	羹	群	罰	纏	織	通用正
厠	敕	冲	徇	埃	京	亾	並	萬		聳	恥	羹	羣	罰	纏	織	通用正
婚	姊	妍	妊	野	坂	囓	叶	厮	同	艷	館	鋪	阜	致	腸	脈	通用正
婚	姊	妍	妊	埜	阪	齧	協	厮	字	艷	館	鋪	阜	致	腸	脈	通用正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	表	解	霸	衰	衛	蔭	萌	莽	通用正
攷	慚	富	忘	菴	島	峰	峨	嶽	表	解	霸	衰	衛	蔭	萌	莽	通用正
概	槁	楫	棕	棊	案	柿	村	普	表	賈	贊	賓	象	讎	讖	記	通用正
槩	槁	楫	棕	棊	案	柿	村	普	表	賈	贊	賓	象	讎	讖	記	通用正
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	昆	朴	表	隸	隙	間	鎖	隣	輒	軟	通用正
砧	覩	狸	貉	无	煙	汚	毗	樸	表	隸	隙	間	鎖	鄰	輒	軟	通用正
縹	縹	網	紆	糾	粽	筍	競	稿									通用正
縹	縹	網	紆	糾	糉	筍	競	稿									通用正

附録

羈 驕 羈
 船 船
 花 華 狂 衽 谿 遁 遜 雁 鴈
 荒 荒 訛 譌 踪 蹤 銛 矛 雞 鷄
 虱 蠱 譁 嘩 躑 躑 鏤 鏤 駮 駮
 本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字
 トシテ往々混用セラル、モノ、其ノ中
 *標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從
 ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

巨 互
 桓ニ同シ。
 笨ニ同シ。アラシ、龐、粗。
 カラダ。
 タマシ、タマ。但馬
 ツタナシ、拙劣。
 ミダリガハシ、猥。
 身分ヲ越エテゴゾル。僭越
 カブト、兜。「甲冑」
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

協 協
 カナフ、叶。
 ガビヤカス、脅。
 サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
 ウテナ、ダイ。
 後 後
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
 キミ。「皇后」
 アキナヒ。
 モト、本。
 ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。
 ツ、シム。
 ヒメ。

託 託
 拓ニ同シ。オス、ヒラク。
 ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。
 ハラフ。又アグ。
 ニナフ、カツク。
 鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
 アラタム。
 ヤリ。
 鏢ニ同シ。鏢ノ聲ノ形容。
 アクビ。「欠伸」
 カグ。「缺席」
 ホソイト、細絲。
 イト。
 支那ノ地名。
 ウラヤム。

蟲 蟲
 魚介類ノ總稱。又マムシ。
 ムシ。
 ワビ、ワブ。「謬狀」
 訛ニ同シ。アザムク。
 ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。
 禮ノ古字。
 ユタカ。
 マデ。
 ユク、行。
 エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

卻グキ ヒマ、隙。
シリアク。「退卻」

鍛カタン キタフ。「鍛錬」
シコロ、「鍛」

宛字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし

かひ (詮の意
の場合)

きつと

さすが

しまふ

せつかく

だけ

だめ

ちやうど

ちよつと

でたらめ
とうく
とかく
とて、とても

出鱈目
到頭
兎角、左右

とにかく

兎に角
中々、却々

ふるまひ

振舞

はかなし

果敢なし

ほんたう

本當

むだ

無駄

むづかし

六ヶし

やたら

矢鱈

やはり

矢張

附 録 終

山中高等女子学校 第一女子組 胡十綾

大正六年十月二十七日印刷
大正七年一月十六日訂正再版印刷
大正七年十月十九日訂正再版印刷
大正七年十月十八日訂正再版印刷
大正七年十月二十一日訂正再版印刷
大正十年十二月廿六日改訂再版發行

改訂女子國文典附	
定	價
卷一—卷四、各金四拾錢	
卷五—卷七、各金參拾八錢	
卷八—各金參拾七錢	
卷九—各金四拾錢	

大正十二年度臨時定價金六拾八錢



編者 芳賀矢一
東京市神田區通神保町九番地
合資會社 富山房
代表者 坂本嘉治馬
合資會社 富山房社長
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舎第一工場
印刷所

發行所

東京市神田區
通神保町九番地

合資會社

富山房

富山房

富山房

電話神田三〇一四・神田三七六〇
振替口座東京五〇一番

YAMANAKA

High School



第一学年小组

胡子綾



yamanaka high school-girl

aya aisu.

